京都府舞鶴市

田畔（たぐろ）遺跡第2次発掘調査報告書

2019年3月

舞　鶴　市

巻頭図版

（1）調査地遠景（南東から）

（2）調査地遠景（北西から）

序

本書は平成29年９月から12月に実施した田畔遺跡第２次発掘調査の報告書です。

田畔遺跡の所在する朝来地区は、東西に長く延びる朝来谷が、地名の由来とも言われている「あぜくら」からもわかるように、古来から豊かな田園地帯として恵みをもたらし、また、府北部でも有数規模の古墳時代後期の古墳群である「大波・奥原古墳群」を有するなど、本市の古代史を考える上で欠かせない地域です。

田畔遺跡では、これまで平成18年度、19年度に発掘調査を実施しており、飛鳥時代に集落が発達し、平安時代末から鎌倉時代にかけて終焉を迎えたことが明らかになっています。今回の調査では、日々の生活の跡だけでなく、魚網に使う土錘や、祭祀に使われた土馬など、田畔遺跡で生活していた人々の営みが感じられる遺物が出土しました。飛鳥時代の集落がさらに広範囲に広がっていたことや、本遺跡では初めてとなる古墳が見つかったことも注目されます。とりわけ、隣接する「大波・奥原古墳群」の造営に深く関わったと考えられる集落の様相を明らかにできたことは貴重な成果です。

今後とも、本市の歴史が着実に明らかになっていくことを期待するとともに、本書が皆様に広く利用され、地域の歴史文化への理解を深める一助としてお役に立つことができれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査を実施するにあたり、ご理解とご協力を賜りました大波上自治会をはじめとする関係者各位、並びに調査に参加いただきました方々のご労苦に対しまして、衷心よりお礼申しあげます。

平成３１年３月

舞鶴市教育委員会

教育長　奥水　孝志

例　言

1．本書は、舞鶴市字大波上小字田黒地内で実施された田畔遺跡第２次発掘調査報告書である。本調査は、舞鶴市が予定している舞鶴市一般廃棄物最終処分場建設に先立つ調査として、平成29年９月４日から12月26日の期間に実施した。
2．発掘調査面積は、全体で2,200㎡であり、Ⅰ区とⅡ区に分かれる。
3．調査は、舞鶴市が主体となり実施したが、株式会社イビソクの調査支援を受けた。
4．現地調査は松﨑健太（舞鶴市文化振興課）・濱村友美（株式会社イビソク）・小林俊之（同）が実施し、吉岡博之（舞鶴市文化振興課）・松本達也（同）の指導・助言を得た。
5．調査・報告に使用した座標は、現地にある既存の基準点（国土座標平面直角座標系（世界測地系）第Ⅵ系（ただし、単位（m）を省略））を使用した。標高はT．P．：東京湾平均海面高を使用した。
6．本書に使用した現地での土色及び土器の色調記録には、農林水産省農林水産会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修『新版標準土色帖（2015年度版）』を使用した。
7．写真は現地写真を濱村が撮影し、遺物写真を横山亮（オフィスメガネ）が撮影した。航空写真撮影は有限会社ウィングが撮影した。また、遺構図版・遺物図版は株式会社イビソクが作成した。
8．本書は、第１章第１節・第２章・第５章第２節を松﨑が、第４章を山下祐介（株式会社イビソク）が、その他を濱村が執筆した。全体の編集は松﨑が行った。
9．本書で使用した資料及び記録類、調査で作成した資料は、舞鶴市が保管している。
10．現地調査・整理報告を実施するにあたり、大波上自治会をはじめ京都府教育委員会、舞鶴市生活環境課など、多くの関係者の皆様にご指導・ご助言を頂いた。ここに記して感謝いたします。
　中居和志（京都府文化財保護課）、桐井理揮（京都府埋蔵文化財調査研究センター）
11．現地調査に参加していただいた方々は以下のとおりである。（順不同、敬称略）
　梅垣元延、関本長三郎、関本昇、関本寿一、森下喜美夫、森本正美、森脇光男、
　舞鶴市シルバー人材センター

凡　例

1．本調査での遺構番号は遺構毎に通番とし、出土遺物は全て層位、遺構毎に遺物カードを付して取り上げている。その後、本書編集段階で遺構の性格を付与し、調査年度の西暦下二桁を遺構番号の頭に付し、遺構種別毎に通し番号を下二桁に割り当てた。
2．本書での遺構、遺物実測図の縮尺は、図版毎に設定している。
3．本書での写真図版の縮尺は任意である。
4．本書では、遺構について書きの略号を用いた。
　掘立柱建物跡－SB、竪穴式住居跡－SH、土坑－SK、溝－SD、石室－ST、
　炉・カマド－SL、柱穴・ピット－SP
5．土師器の年代観は、奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原京発掘調査Ⅱ』（1978）の編年を基準とした。須恵器は『須恵器大成』（1981）の編年を使用した。

目　次

第１章　調査経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1
　第１節　調査に至る経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　1
　第２節　調査日誌・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　2
　第３節　調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　4
第２章　調査地の環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　5
　第１節　調査地の地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　5
　第２節　調査地の歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　5
第３章　遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　7
　第１節　基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　7
　第２節　田畔遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　7
　　第１項　遺構の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　7
　　第２項　Ⅰ区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　7
　　第３項　Ⅱ区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　8
　第３節　田畔古墳・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　11
第４章　遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　12
　第１節　遺物の概観・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　12
　　第１項　Ⅰ区出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　12
　　第２項　Ⅱ区出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　13
第５章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　18
　第１節　平成29年度調査について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　18
　第２節　これまでの調査のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・　20

図版目次

巻頭図版　（１）調査地遠景（南東から）
（２）調査地遠景（北西から）
図版１　田畔遺跡全体図
図版２　田畔遺跡29年度調査Ⅰ・Ⅱ区全体図
図版３　田畔遺跡29年度調査Ⅰ区全体図
図版４　田畔遺跡29年度調査Ⅱ区全体図
図版５　田畔遺跡29年度調査Ⅱ区下面遺構全体図
図版６　Ⅰ区壁面断面図
図版７　Ⅱ区北壁断面図
図版８　Ⅱ区南壁断面図
図版９　Ⅱ区南壁・東壁・下層確認断面図
図版10　Ⅰ区SK1701実測図
図版11　Ⅱ区SH1701実測図
図版12　Ⅱ区SH1702実測図
図版13　Ⅱ区SH1703実測図
図版14　Ⅱ区SH1704実測図
図版15　Ⅱ区SH1705・1706実測図
図版16　Ⅱ区SB1701実測図
図版17　Ⅱ区SB1702実測図
図版18　Ⅱ区ST1701実測図（１）
図版19　Ⅱ区ST1701実測図（２）
図版20　Ⅱ区ST1701実測図（３）
図版21　出土遺物
図版22　出土遺物
図版23　（１）Ⅱ区調査前風景（東から）
（２）Ⅱ区調査区近景
図版24　（１）Ⅱ区北側壁面（旧表土）
（２）Ⅰ区SK1701完掘状況（東から）
図版25　（１）Ⅱ区谷状地形土層断面（北から）
（２）Ⅱ区谷状地形礫検出状況（南から）
図版26　（１）Ⅰ区土馬出土状況 近景（北西から）
（２）Ⅱ区SH1701完掘状況（西から）
図版27　（１）Ⅱ区SH1702完掘状況（北から）
（２）Ⅱ区SK1703遺物出土状況 遠景（南から）
図版28　（１）Ⅱ区SK1703遺物出土状況 近景（南西から）
（２）Ⅱ区SH1703完掘状況（北から）
図版29　（１）Ⅱ区SL1702遺物出土状況 遠景（北東から）
（２）Ⅱ区SL1702遺物出土状況 近景（北西から）

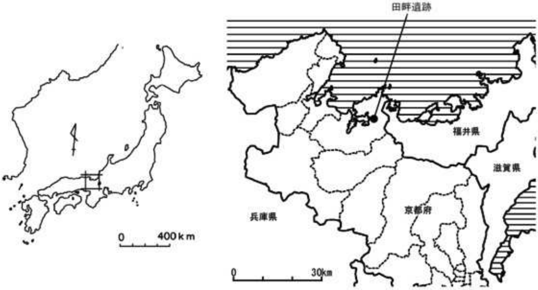
図版30　（１）Ⅱ区SH1704完掘状況（南西から）
　　　　（２）Ⅱ区SH1705・1706完掘状況（北から）
図版31　（１）Ⅱ区SB1701完掘状況（北から）
　　　　（２）Ⅱ区SB1702完掘状況（北から）
図版32　（１）田畔古墳ST1701完掘状況（北東から）
　　　　（２）田畔古墳ST1701完掘状況（北西から）
図版33　（１）Ⅱ区出土遺物（須恵器、土師器、土製品）
図版34　（１）Ⅰ区包含層出土遺物（土馬）
　　　　（２）Ⅱ区SL1702出土遺物　出土状況再現（須恵器、土師器）
図版35　（１）Ⅰ区試掘出土遺物（須恵器、土師器、土製品）
　　　　（２）Ⅱ区竪穴式住居跡出土遺物（須恵器、土師器）
図版36　（１）Ⅱ区その他遺構出土遺物（縄文土器、須恵器、土師器、土製品）
　　　　（２）Ⅱ区表土・包含層出土遺物（須恵器、土師器）

挿図目次

第１図　調査区設定図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
第２図　グリッド設定図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4
第３図　周辺遺跡分布図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6
第４図　大波・奥原古墳群分布図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 22

表目次

表１　包含層出土遺物破片数集計表・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
表２　遺物観察表（１）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24
表３　遺物観察表（２）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25



調査位置図

第１章　調査経過

第１節　調査に至る経緯

田畔遺跡は昭和60年から平成元年にわたって実施された舞鶴市内遺跡分布調査によってその存在が確認され、平成２年刊行の「舞鶴市遺跡地図」に掲載された。分布調査では、遺跡範囲内の畑で奈良時代から平安時代の須恵器・土師器が表面採集された。その後、個人の表面採集によって、古墳時代後期の須恵器や、緑釉陶器や白磁等も確認され、遺跡の内容や範囲が概観できるようになっていた。

平成15年に当時稼働中であった舞鶴市の一般廃棄物最終処分場の残余容量が僅かとなり、次期最終処分場候補地として舞鶴市字大波上小字田黒地区が選定された。候補地が埋蔵文化財包蔵地であることから、開発部局である舞鶴市生活環境課との協議の結果、埋蔵文化財の現状保存が困難であることから、平成18年度、19年度にわたって発掘調査が実施された。その後、平成22年に舞鶴市一般廃棄物最終処分場として供用が開始された。

処分場内の埋立て残余容量減少に伴い、舞鶴市生活環境課では平成26年度から次期処分場候補地選定を開始し、現在稼働中の処分場南側に次期処分場を整備する整備案を策定した。

整備案は平成18・19年度発掘調査範囲のさらに南側を大きく造成するもので、埋蔵文化財に影響が及ぶ恐れがあると判断された。そのため、舞鶴市生活環境課と社会教育課がその保全について協議を行い、予定地内の埋蔵文化財についてその範囲と内容を確認するための試掘調査が必要と判断し、平成27年度に試掘調査を実施した。試掘調査では一部調査区で遺物・遺構が確認され、平成18・19年度の調査範囲からさらに南側にも埋蔵文化財が広がっていることが確認された。これを受け、埋蔵文化財の保存について協議を継続したが、設計変更等によって予定地内の埋蔵文化財について影響を避けることが難しく、約2,200㎡の範囲について発掘調査による記録保存を実施することで合意した。

発掘調査は舞鶴市が調査主体となり、実務を文化振興課が担当して、平成29年９月４日から12月26日の期間で実施した。なお、調査範囲が広範なため、株式会社イビソクの調査支援を受けた。

出土品整理・報告書編集作業については平成30年度に実施し、同じく株式会社イビソクの作業支援を受けた。

なお、一連の事業費については環境省の循環型社会形成推進交付金の交付を受けた。

第２節　調査日誌

本調査は、現地調査を平成29年９月４日より開始し、12月26日に終了した。その後、平成30年５月14日より６月12日の期間で一次整理作業を行い、６月16日から報告書作成のため遺物の実測、遺物・遺構図版の作成、原稿執筆を行った。以下に調査日誌を掲載し、調査・整理作業の経過に変えたい。

平成29年８月25日

基準点設置。

８月30日

資材搬入。調査地の環境整備を行う。

９月４日

現地調査開始。Ⅱ区南東部から、重機による表土掘削を開始する。

９月13日

Ⅱ区遺構検出を開始する。

10月10日

Ⅱ区遺構掘削を開始する。流土による撹乱から掘削を行う。

10月17日

Ⅰ区重機による表土掘削を開始する。

11月８日

Ⅰ区包含層から土馬が出土する。

11月11日

Ⅱ区の撹乱部において、重機による掘削で下層確認を行う。

11月22日

Ⅰ区の調査区を拡張し、遺構検出及び掘削を行う。

11月27日

Ⅱ区にて石室（ST1701）と竪穴式住居（SH1701）を確認する。

11月28日

Ⅰ区の遺構検出、遺構掘削を開始する。

12月５日

報道関係者に対する説明会を行う。

12月７日

ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影図化を実施する。

12月９日

現地説明会を行う。参加者約60名。

Ⅱ区遺構検出

SH1702調査風景

SH1703調査風景

現地説明会

12月15日
　作業員雇用が終了。
12月26日
　仮設・機材等の搬出を完了する。
　本日をもって、現地調査を終了する。

平成30年
5月14日
　出土遺物の洗浄・注記作業を開始する。
6月4日
　出土遺物の接合作業を開始する。
6月6日
　接合が完了した遺物から復元・着色作業を開始する。
6月12日
　一次整理を終了する。
6月16日
　舞鶴市立会いのもと、実測を行う遺物を選別し、実測作業を開始する。
6月27日
　遺物実測図トレースを開始する。
7月31日
　遺物実測図トレースを終了する。
8月7日
　遺物写真を撮影する。
9月3日
　遺構遺物図版の版組を開始する。
10月1日
　原稿執筆開始する。
12月7日
　報告書の全体編集を開始する。

平成31年
3月15日
　報告書刊行。
3月15日
　事業を完了。

遺物注記

遺物石膏入れ

遺物実測

報告書編集

第３節　調査の方法

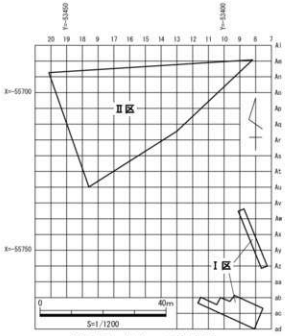
調査区は、平成28年度に実施した試掘調査の結果をもとに設定した。

Ⅰ区には幅約２ｍ、長さ約20ｍの調査区を２ヵ所設置した。南側の調査区では、遺構が区外へ続く可能性があり、確認のため拡張した。調査面積計は約138.8㎡である。Ⅱ区の面積は約1470㎡で、Ⅰ区とⅡ区合わせて掘削面積は約1608.8㎡である。調査区の地区割りは、世界測地系Ⅵ系にもとづき、調査区内に５ｍ間隔でグリッドを組んだ。グリッドは調査区全体が収まるよう設定し、南北方向をアルファベット、東西方向を算用数字で表記した。この表記は、平成18年度及び19年度調査区名と連続するよう設定した。北東交点の杭をもって地区名とした。この地区名は、遺構配置の把握や出土遺物の取り上げに使用した。

調査はⅡ区から着手し、重機により表土層を遺構検出面まで掘削した。Ⅱ区北東側で、表土層から遺構検出面までの厚さが1.5ｍに達したため、安全を考慮し勾配をつけて壁面を保護成形した。重機による掘削が終了した地点から、人力による遺構の検出及び掘削を実施した。Ⅰ区の調査も、同様の方法で行った。検出した遺構は図面作成・写真撮影等の記録作成を順次行った。

調査中に出土した遺物は、現地にて簡易な洗浄を行い、遺構等の時期判別のための判断材料とした。調査の全容が判明した段階で、調査成果公表のために報道発表と現地説明会を行った。Ⅱ区の調査中、調査区北東において遺構検出面よりも下層で、部分的に旧表土が残存することが確認されたため、説明会終了後に旧表土下面まで重機により掘削し、遺構の有無を確認した。また、Ⅱ区南東部に石室が検出されたため、調査区外へサブトレンチを４本入れ、同様の石室の有無を確認した。なお、古墳については田畔古墳と呼称することとし、新規の遺跡として記載した。

第１図　調査区設定図



第２図　グリッド設定図

第２章　調査地の環境

第１節　調査地の地理的環境

田畔遺跡は京都府舞鶴市字大波上小字田黒に所在する。舞鶴市は京都府東北部に位置し、北は日本海（若狭湾）に面している。市の中央部には、幅約１km弱の湾口部から舞鶴湾が南に湾入し、さらに二股に分かれて東西に深く入り組んだリアス式海岸を形成している。舞鶴湾の周囲には標高200m～300mの急峻な山稜が海まで迫っており、福井県との県境には、若狭富士とも呼ばれる青葉山（標高693m）がそびえる。

田畔遺跡はこの青葉山の山麓から舞鶴湾に至る、東西方向約５kmの朝来（あせく）谷に位置している。朝来谷は青葉山から東に連なる急峻な丘陵が、300m～400mの平野部を挟んで南北に迫っており、谷を流れる朝来川が吉野川と谷の中央で合流し、西へ流れて舞鶴湾に注いでいる。遺跡は、現状の朝来川河口から約１km上流の地点にあたり、朝来谷南側山塊から北側に広がる沖積錐に位置している。

朝来地区は舞鶴付近から中国山地へ、北東から南西方向に貫く「舞鶴帯」と呼ばれる古生代・新生代の地質帯内に位置しており、古生代のデイサイトや流紋岩類を主とする地質構成が広がっている。

第２節　調査地の歴史的環境

田畔遺跡は、朝来谷と呼ばれる地域に位置している。「朝来」の地名由来は諸説あるが、校倉造の“あぜくら”が転じたものとされている。朝来地区の古代については、本格的な調査事例が無く不明瞭ではあるが、田畔遺跡で縄文時代後期の土器片が出土（H18年度調査）しているほか、朝来川改修工事の際に、田畔遺跡付近で弥生時代後期の土器（蓋）が出土したと伝わる。古墳時代になると、古墳時代前期～中期の木棺直葬の埋葬施設を有するとみられる古墳が海浜部を中心に分布しており（大波下４号墳・赤崎古墳群）、周囲に同時期の集落の存在が想定される。

古墳時代後期になると、京都府北部でも有数の後期古墳群である大波・奥原古墳群が形成される。両群の総数は78基を数え、多くは横穴式石室が簡素化される終末期古墳の様相を呈する小規模墳で構成されている。

平安時代には、田畔遺跡で塩づくりが行われている。その他、白屋の薬師堂には、平安時代の仏像群（舞鶴市指定文化財）が現存しており、朝来地区に寺院が存在した可能性がある。

中世には、朝来地区は志楽荘の一部として文献にみることができる。志楽荘は、現在の志楽川流域の志楽谷一帯だけを指すものではなく、朝来谷や大浦半島も含めた広い範囲を指すとみられている。丹後志楽荘の名は、平治元年（1159）の宝荘厳院領荘園注文で最初にみられる。宝荘厳院は鳥羽上皇の御願寺であるが、領家は平清盛であった。室町時代の観応元年（1350）には、朝来村の地頭職が足利尊氏から醍醐寺三宝院賢俊僧正へ修造料所として寄進され、醍醐寺三宝院門跡領となった。観応２年（1351）には、志楽荘朝来村で田辺郷に在している川端兵衛三郎が濫妨し、醍醐寺を通じて幕府に訴えている書状などが醍醐寺文書に残されている。また、朝来谷の北東部に位置する登尾八幡神社には、南朝の年号である「正平七年」（1352）の刻印を持つ御正体鏡（舞鶴市指定文化財）がある。当時、周辺は北朝の勢力下であったとみら

れるが、南朝側の年号を記した鏡が存在することからも、複雑な情勢が伺える。

室町時代は丹後の守護職であった一色氏の統治となるが、田口神社の本殿前には一色修理太夫義直の寄進と伝わる「享徳三年十月」(1454) の銘を持つ石灯籠（舞鶴市指定文化財）がある。

この他、中世には大波下城や岡安城、登尾城をはじめとして数カ所に山城が築かれている。

近世には、田口神社の大祭に歴代藩主が参拝したと伝わり、本殿・拝殿（府指定文化財）が江戸時代の所産とされている。

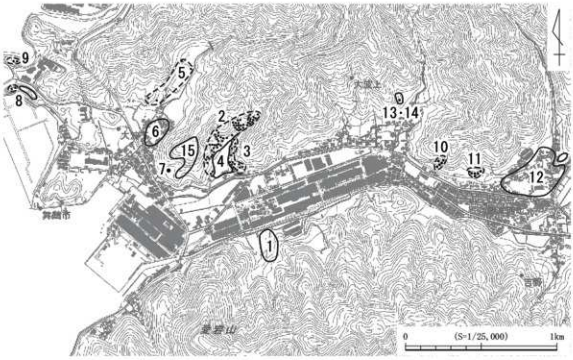
近代には、大正10年の朝来川の氾濫によって田畑が壊滅的な被害を被ったことから河川改修が行われた。また、昭和14～16年にかけては広範囲にわたって海軍の第三火薬廠の造成が行われた。田畔遺跡地内においても、一般廃棄物最終処分場建設以前には、火薬廠時代の建物基礎や構造物が残存しており、今回の調査地付近についても火薬廠時代の造成が及んでいたものと考えられる。

参考文献

松本節子『舞鶴の文化財』舞鶴市民新聞

舞鶴市史編さん委員会 1993『舞鶴市史　通史編（上）』舞鶴市

髙橋聰子 2002「丹後国志楽荘と中世の村」『泉源寺遺跡第３次発掘調査概要報告書』（舞鶴市文化財調査報告第 39 集）　舞鶴市教育委員会



1．田畔遺跡	2．大波古墳群	3．奥原古墳群	4．大波上遺跡	5．大波下古墳群
6．大波下遺跡	7．大波薬師古墳	8．赤崎古墳群	9．小浦古墳群	10．宮ノ下古墳群
11．ノケ古墳群	12．朝来中遺跡	13．大波上経塚	14．大波上支城跡	15．大波下城跡

第３図　周辺遺跡分布図

第３章　遺構

第１節　基本層序（図版６～９）

Ⅰ区の基本層序は、上層より表土層、遺物包含層、地山層の３層に分けられる。第１層は表土層で、にぶい黄褐色礫土が約20cm堆積する。第２層は流土による遺物包含層で、灰黄褐色粘質土を中心に約10～50cm堆積する。包含される遺物は７世紀中頃以降のものを主体とする。第３層は黄褐色粘質土の地山層で、上面が遺構検出面である。

Ⅱ区の基本層序は表土層、田畑耕作土層、地山層の３層に分けられる。第１層は表土層で、明黄褐色礫土が約70cm～１ｍ堆積する。第２層は近現代の田畑の耕作土層で、黒褐色土が約20～50cm堆積する。この層により、遺物包含層や遺構検出面が大部分削平されるが、遺物包含層がわずかに残存する箇所も見受けられた。包含される遺物は７世紀中頃以降のものである。第３層は地山層である。地山層の上面が遺構検出面である。

また、Ⅱ区は旧地形が調査区南東から北西に向かって谷状地形となっており、近現代には段々畑として利用されてきたが、舞鶴市一般廃棄場最終処分場の建設に伴って盛土整地され、旧地形を失っている状態であった。盛土の厚さは調査区北西端で約2.1ｍを測り、これより下層は褐色砂質粘土の地山層である（図版９・25）。

さらに、Ⅱ区の北東側では上記の遺構検出層の下層に約30cmの旧表土層が残存し、部分的に遺構検出面が２面となる地点がある。

第２節　田畔遺跡

第１項　遺構の概要

本調査では、７世紀中頃～８世紀前半を中心とする遺構を検出した。主な遺構は横穴式石室１基、竪穴式住居跡６棟、建物跡２棟、溝状遺構、土坑等で、検出遺構数は約500基である。住居跡等の主要遺構は全て調査Ⅱ区から検出した。以下、各遺構の概要を記す。

第２項　Ⅰ区

Ⅰ区では、土坑及びピット数基を検出した。ピットの検出位置には規則性がなく、建物跡と確認できなかった。遺構出土の遺物はSK1701のみと少量であったが、遺物包含層からの遺物出土数は多く、Ⅱ区と比べて約３倍近い遺物密度となった。

表１　包含層出土遺物破片数集計表

Ⅰ区

グリッド名	破片数
Aw8	5
Ay7	3
Ax7	1
ab10	20
ab9	42
ac7	1
ac8	2
ac9	1
総破片数	75

Ⅱ区

グリッド名	破片数	グリッド名	破片数	グリッド名	破片数
Am11	17	An19	1	Ap15	4
Am18	9	Ao11	8	Ap16	4
Am19	9	Ao12	13	Ap17	3
An11	24	Ao13	3	Aq13	6
An12	23	Ao14	1	Aq14	6
An14	1	Ao15	4	Ar15	1
An16	63	Ao16	1	Ar16	38
An17	13	Ao17	2	As17	7
An18	10	Ap14	3	At17	18
				総破片数	292

１．土坑

SK1701（図版10・24）

調査区南側トレンチ(ab９)で検出した。平面形は円形を呈する。長軸2.5m、短軸2.0mを測る。複数のピットと重複する。遺物はSK1701からのみ出土し、それぞれ７世紀～８世紀前半の様相を呈する。

第３項　Ⅱ区

１．竪穴式住居跡

検出した竪穴式住居跡は６棟だが、いずれも後世の削平により遺存状態が悪く、全容を把握できるものはなかった。

SH1701（図版11・19・26）

調査区南部（Ar15）で検出した。平面形は隅丸方形を呈する。SH1701上部に石室（ST1701）を確認し、さらに上部に７世紀中頃～後半の土坑であるSK1711、1712を検出した（図版20）。重複関係はSK1711、1712が最も新しく、次にST1701、最後にSH1701の順となる。SH1701西側上端はこれらの遺構により削平されるが、ST1701床面からSH1701周壁溝の残存部が検出された。主軸方向はN-55°-Eであるが、後世の削平により北半部が大きく消失する。残存長は北東－南西4.5m、北西－南東1.4mである。最大残存壁高は35cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。壁際の床面には深さ約10cmの周壁溝がめぐる。床面の標高は17.17mである。

床面で検出した遺構は、地床炉（SL1701）、主柱穴（SP1701）である。SL1701は、地山面を浅く掘り込み、床面に被熱痕が見られることから地床炉と判断した。炉は住居跡中心から南西寄りに位置する。SP1701は、長径47cm、短径27cm、深さ18cmを測る。住居跡中心から見て南西隅に位置することから主柱穴と判断した。南東隅には後世の掘り込み（SK1702、1726）があり、北半部は大きく撹乱されていることからSP1701以外の柱穴は確認されなかった。

SH1701から年代を確定できる遺物は出土しなかったが、上部遺構であるSK1711から須恵器TK46型式の杯蓋が出土した（図版22）。また、ST1701の年代を７世紀中頃と想定したため、SH1701はそれ以前の遺構と推測される。

SH1702（図版12・27）

調査区北部（Am12）で検出した。平面形は隅丸方形を呈する。主軸方向はN-91°-Eであるが、試掘トレンチにより遺構上端がほぼ削平され、住居跡西側の立ち上がりは消失する。また、調査区の北端に位置しており、遺構の北半部は調査区外へ続く。東西長3.6m以上、南北長2.1m以上、最大残存壁高は23cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面の一部には黒褐色粘土を確認した。粘土には小石や土器片が含まれ、固くしまる。貼床の可能性が考えられる。床面の標高は14.68mである。

床面で検出した遺構は、土坑２基（SK1703、1704）、ピット２基（SP1702、1703）である。SK1703からは、７世紀後半～８世紀前半の遺物が出土した。これはSH1702の埋土から出土した遺物と同時期であるため、住居が埋まった時期との差は大きくないと推測される。SK1703は、長径2.16m、短径1.10m以上、深さ0.7mを測る。埋土は４層に分けられ、上層（１・２層）において土師器の甕２点と須恵器の杯１点が出土した。甕は２点とも口縁部から体部上部まで残存する個体で、２段に重なった状態で出土した。上段の甕は細かく割れた状態だったが、下段の甕は口縁部を下に伏せた状態を検出した（図版27）。

遺物はそれぞれ７世紀後半～８世紀前半の様相を呈し、住居跡の廃絶時期のものである可能性が高い。

SH1703（図版13・28・29）

調査区中央部（Ap15・16）で検出した。平面形は隅丸方形を呈する。主軸方向はN-153°-Eであるが、後世の削平により北側が大きく消失する。また、遺構の遺存する範囲でも、後世の遺構による削平が著しいため、住居跡の遺存状態は非常に悪い。残存長は北西-南東2.82m、北東-南西2.45m、最大残存壁高８cmを測り、緩やかに立ち上がる。床面の標高は15.95mである。

床面で検出した遺構は、カマド（SL1702）、複数のピットである。周壁溝や主柱穴と考えられる遺構は確認できなかった。

SL1702の検出位置は住居跡南隅で、焚口は住居跡の壁から離れて造られる。主軸方向はN-115°-Eで、住居跡の主軸方向より北に振れる。カマドの規模は両袖間81cm、焚口から煙道部にかけての残存長は1.08mを測る。袖掘方の規模は、東側（SK1706）は長軸76cm、短軸34cm、深さ14cm、底面標高は15.85mである。西側（SK1707）は長軸70cm、短軸26cm、深さ15cm、底面標高は15.85mである。焚口から燃焼部にかけての断面形状は皿状を呈し、焚口底面は被熱している。焚口底面から約10cm直上の埋土中から、土師器の甕２点と須恵器の杯蓋が１点出土した。甕は２点ともに口縁部から体部上部まで残存し、いずれも口縁部を下に伏せた状態であった。並列する両甕の軸は、住居跡の北東－南西軸と並行する。須恵器の杯蓋は、並列する両甕の軸から見て直交する位置に配置され、住居跡の北西－南東軸と並行する。出土地点の標高は、ともに16.11mである。杯蓋は北西-南東軸と並行にならび、内面を上に向けた状態であった。出土地点の標高は16.10mである。以上の遺物は、出土地点の標高値がそろうこと、住居跡主軸と並行する位置であることから、カマド廃絶後に人為的に置かれたと判断した。また、出土位置がカマド底面ではなく、埋土中であったことから、カマドを埋める際に並べたと考えられる。遺物はそれぞれ７世紀後半～８世紀前半の様相を呈し、住居跡の廃絶時期のものである可能性が高い。

SK1705の埋土上層には焼土が含まれており、多量の小礫にとともに砥石が出土した。住居跡の埋土上面から掘り込まれていることから、住居廃絶後に伴う遺構の可能性もあるが、年代の特定できる遺物が出土せず、住居跡との時期差は不明である。

SH1704（図版14・30）

調査区中央部（Ap15・16）で検出した。平面形は隅丸方形を呈するが、後世の削平により南西側が大きく消失する。主軸方向はN-136°-Eである。また、後世の掘り込みによる重複が密であるため、住居跡の遺存状態は非常に悪い。残存長は北西-南東3.03m、北東-南西2.15m、最大残存壁高0.22mを測り、緩やかに立ち上がる。床面の標高は15.96mである。

住居跡に伴う遺構は、溝状遺構（SD1704、1705）、主柱穴（SP1704、1705）である。

SD1704、1705は住居跡外周をＬ字状に廻る。断面形状は皿状を呈し、埋土は小礫を多量に含む粘質土であった。SD1705は住居跡南側から東側へ、SD1704は東側から北側へ廻るが、両者は接続しない。住居跡外周をＬ字状に廻る溝は、これまでの調査においても複数検出され、住居跡への水の浸入を防ぐ役割を担う外部施設であったと考えられる。SD1704、1705についても、同様の役割を持つ遺構であると判断した。

住居跡内及び溝状遺構から、年代の確定できる遺物は出土しなかった。

SH1705（図版15・30）

調査区北部（An15）で検出した。平面形は隅丸方形を呈する。主軸方向はN-53°-Eであるが、試掘トレンチ及び遺構の重複により遺構北側を大きく消失する。残存長は南北2.57m、東西3.08m、最大残存壁高35cmを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面の標高は14.67mである。

住居跡に伴う遺構は、主柱穴（SP1708、1709）、複数の土坑及びピットである。中には焼土や炭粒が埋土に含有される土坑が確認されたが、いずれも地山は被熱していなかった。遺物は７世紀中頃～後半のものが出土した。埋土から、SH1702埋土出土の土師器甕と同一個体が出土し接合したことから、両住居跡の廃絶時期は同時期であると推測される。

SH1706（図版16・26）

調査区北部（An15）で検出した。平面形は方形を呈する。主軸方向はN-66°-Eであるが、試掘トレンチの影響及び遺構の重複により北側を大きく消失する。SH1705と重複する。重複関係はSH1705が新しい。残存長は南北1.85m、東西4.17m、最大残存壁高0.30mを測り、ほぼ垂直に立ち上がる。床面の標高は14.68mである。残存状況が悪く、主柱穴等の住居跡に伴う遺構は確認できなかった。年代のを示す遺物は出土しなかったが、SH1705よりも古い住居跡であるため、７世紀中頃～後半以前と推測される。

２．掘立柱住居跡

SB1701（図版15・31）

調査区北部（An・Ao12～14）で検出した。桁行４間（11.4m）、梁行２間（4.5m）以上、平均柱間棟は2.85mである。方向はN-24°-Eであるが、試掘トレンチにより北側を大きく消失する。柱穴の掘方は円形及び楕円形を呈し、直径0.4～1.3mで、深さは20～50cmである。年代の確定できる遺物は出土しなかった。

SB1702（図版17・31）

調査区北西部（An17・18）で検出した。桁行３間（7.2m）、梁行２間（2.2m）以上、平均柱間棟は2.4mである。棟方向はN-98°-Eであるが、試掘トレンチにより北側を大きく消失する。柱穴の掘方は円形及び楕円形を呈し、直径0.7～1.0mで、深さは20～40cmである。年代の確定できる遺物は出土しなかった。

３．下層遺構（図版５）

調査Ⅱ区の北東一部の範囲において、旧表土を検出した。

旧表土除去後、下面の遺構検出を行い、複数のピットを確認したが、遺物が出土せず年代の確定には至らなかった。

第３節　田畔古墳

１．横穴式石室

ST1701（図版18～20・32）

調査区南側（Ar15）で検出した。石室上部は、７世紀中頃～後半の土坑であるSK1711、SK1712により消失する。また、右側壁の基底石及び奥壁は残存するが、原位置ではない。左側壁は２段残存する。

石室は地形の斜面に対して直交する形で造られる。規模は、残存長で奥行1.43m、幅50cm、深さ25cmを測る。床面の標高は、奥壁付近で17.34m、玄室北端で17.24mを測り、奥壁から開口部方向へ緩やかに傾斜する。

掘方の規模は、残存長で奥行1.70m、幅1.11m、深さ25cmを測る。

SH1701と重複し、断面観察から、SH1701の埋土を掘り込んでいることが確認できたため、新旧関係はST1701の方が新しい（図版18）。また、石室床面からSH1701の周壁溝が検出された。

ST1701から年代を確定できる遺物は出土しなかったが、上部遺構であるSK1711を７世紀中頃～後半としたため、ST1701はそれ以前の遺構と考えられる。

第４章　遺物

第１節　遺物の概観

遺物はコンテナで５箱を数える。その内、図化できるものを70点実測し、45点掲載した。出土遺物は７世紀～８世紀前半のものが、調査区全体にかけて出土している。

Ⅰ区では包含層からの出土が多く、遺構に伴うものは少量であった。遺物は、土師器の杯や碗、須恵器の杯や蓋等が中心に出土した。

Ⅱ区では竪穴式住居跡からの出土が多く、土師器の甕や杯、須恵器の杯や蓋等が中心に出土した。

以下、各地区の主要遺構毎に詳細を述べた後、包含層、表土層、試掘調査出土遺物の順で報告する。

第１項　Ⅰ区出土遺物

SK1701（図版21・35、１～７）

竈（１）　１は土師器の竈である。焚き口の一部から右脚にかけて残存し、外面には粘土貼付による庇を持つ。器高は残存で13.7cmを測る。上端部は緩やかに傾斜し、下端部に向けて厚みを持つ。脚部外面はナデ、内面はヘラケズリ成形である。胎土はにぶい黄橙色（10YR6/4）を呈し、焼成は良好である。

杯蓋（２～４）　２、３、４は須恵器の杯蓋である。２はつまみから天井部まで残存する。器高は残存で1.9cmを測る。外面はヘラケズリ、内面はヨコナデ調整である。天井部に扁平な宝珠形つまみを持つ。胎土は灰色（5Y7/1）を呈し、焼成は良好である。MT21型式に併行し、８世紀前半のものと考える。３は口径13.9cm、器高は残存で1.9cmを測る。天井部外面は回転ヘラケズリ、体部外面から内面にかけてロクロナデ調整である。口縁部内面にかえりを持つ胎土は内面が灰色（5Y6/1）、外面がオリーブ黒色（5Y3/2）を呈し、焼成は良好である。TK46型式に併行し、７世紀中頃～後半のものと考える。４は体部から口縁部まで残存する。口径10.3cm、器高は残存で2.9cmを測る。内外面ともにロクロナデ調整だが、体部外面上端に回転ヘラケズリが認められる。口縁端部は下方へ短く屈曲し、屈曲部はにぶい稜をなす。胎土は内面が灰白色（5Y5/1）、外面が暗灰色（H3/0）を呈し、焼成は良好である。TK217型式に併行し、７世紀前半～中頃のものと考える。

土錘（５～７）　５～７は土錘である。５は長さ6.4cm、幅1.7cm、厚さ1.6cmを測る。外面は摩滅しているが、ナデの痕跡が見られる。胎土は橙色（7.5YR6/6）を呈し、焼成は良好である。６は長さ5.3cm、幅1.6cm、厚さ1.6cmを測る。片方の端部が欠損する。外面はナデ調整である。胎土は橙色（7.5YR7/6）を呈し、焼成は良好である。７は長さ5.1cm、幅1.7cm、厚さ1.6cmを測る。外面はナデ調整で、部分的に指オサエが見られる。胎土は赤褐色（5YR5/6）を呈し、焼成は良好である。

包含層出土（図版21・34・35、８・９）

土馬（８）　８は土製品の土馬である。頸部から胴部まで残存し、長さは10.9cm、胴部最大幅は4.4cm、器高は残存で7.3cmを測る。頸部から胴部は１つの粘土塊で成形される。胴部には

脚部を差し込んだ痕跡が残る。胴部は中空構造であるが、頸部以上は中実である。中空部分の穴の直径は1.7cm、長さ5.5cmを測る。手綱、胸繋が線刻で表現され、鬣、前輪は粗雑ではあるが、鬣、前輪の下端部分に粘土を貼り付け、その後ナデ調整を施す。胎土は橙色（5YR7/6）を呈し、焼成は良好である。類例として藤原宮跡出土品（金子1988）があり、７世紀後半頃の年代が推定されることから、飛鳥Ⅳ期に併行すると考える。

椀（９）　９は土師器の椀である。口径10.8cm、器高は残存で4.3cmを測る。底部外面から体部外面はヘラケズリ、体部内面、口縁部内外面はナデ調整である。体部は丸みを持ち、口縁下部に稜を持つ。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、端部はやや尖り気味におさまる。胎土は橙色（7.5YR6/6）を呈し、焼成は良好である。口縁部内面から体部外面上部にかけてススの付着が認められる。飛鳥Ⅰ期に比定し、７世紀前半のものと考える。

第２項　Ⅱ区出土遺物

SH1702（図版21・33・35、10～11）

甕（10）　10は土師器の甕である。口径16.0cm、体部最大径16.5cm、器高17.0cmを測る。体部は丸みを持ち、中位において最大径を測る。体部外面は縦方向のハケメにより仕上げる。体部内面上部は指オサエ後にナデ調整、下部はヘラケズリ後、指オサエを施す。口縁部は内外面ともにナデ調整である。くの字状を呈し、内面に明瞭な段を持つ。端部は丸くおさめる。胎土は橙色（7.5YR7/6）を呈し、焼成は良好である。体部外面、口縁部内外面の一部にススの付着が認められる。共伴遺物の土師器の杯（11）から飛鳥Ⅴ期に比定し、７世紀後半～８世紀前半のものと考える。

杯（11）　11は土師器の杯である。口縁部から体部中位まで残存する。口径10.0cm、器高は残存で3.0cmを測る。体部外面はヘラケズリ、内面はナデ調整である。口縁部内外面はナデ調整で、端部は丸くおさめる。胎土は内面がにぶい赤褐色（5YR5/4）、外面が暗赤褐色（5YR3/2）を呈し、焼成は良好である。口縁部外面から体部外面にかけてススが付着する。飛鳥Ⅴ期に比定し、７世紀後半～８世紀前半と考える。

SH1703（図版21・33・35、12～14）

甕（12）　12は土師器の甕である。口縁部から体部上位まで残存する。口径14.0cm、器高は残存で5.4cmを測る。体部外面は剥離のため調整が不明瞭であるが、ケズリによる成形か。体部内面は指オサエ後ナデ調整である。口縁部はくの字状を呈し、内面に明瞭な段を持つ。端部は丸くおさめる。胎土は外面が明黄褐色（10YR7/6）、内面は暗褐色（10YR4/4）を呈し、焼成は良好である。共伴遺物の土師器の杯（13）から飛鳥Ⅲ期に比定し、７世紀中頃～後半と考える。

杯（13）　13は土師器の杯である。口縁部から体部中位まで残存する。口径13.0cm、器高は残存で2.8cmを測る。体部外面はヘラケズリ、内面はナデ調整である。口縁部はヨコナデにより僅かに外反し、端部は丸くおさめる。胎土は橙色（7.5YR6/6）を呈し、焼成は良好である。体部外面にはススの付着が認められる。飛鳥Ⅲ期に比定し、７世紀中頃～後半と考える。

小壺（14）　14は土師器の小壺である。口径8.0cm、最大径は体部中位で8.9cm、器高は9.6cmを測る。体部は中位で丸みを持ち、半球形である。体部外面は縦方向のハケメにより仕上げ、内面はケズリを施す。体部と口縁部との境界には明瞭な凹みを持ち、ナデ調整を行う。口縁部は短く外方へ開き、端部は丸くおさめる。胎土は内面が褐色（10YR4/1）を呈し、焼成は良好

である。体部外面にススの付着が認められる。共伴遺物の土師器の杯（13）から飛鳥Ⅲ期に比定し、7世紀中頃～後半と考える。

SL1702（図版21・33・35、15～22）

甕（15～18） 15～18は土師器の甕である。口縁部から体部上位まで残存する。15は口径20.6cm、器高は残存で7.0cmを測る。体部外面は縦方向のハケメにより仕上げる。内面上部は指オサエ後ナデ調整、中位はヘラケズリ後指オサエを施す。口縁部はくの字状を呈し、内面に明瞭な段を持つ。端部は丸くおさめる。胎土はにぶい橙色（7.5YR7/4）を呈し、焼成は良好である。16は口径22.4cm、器高は残存で6.8cmを測る。体部外面は縦方向のハケメにより仕上げる。内面はヨコナデ及び指オサエにより調整する。口縁部はくの字状を呈し、内外面に明瞭な段を持つ。端部は丸くおさめる。胎土は橙色（7.5YR6/6）を呈し、焼成は良好である。17は口径10.4cm、器高は残存で10.0cmを測る。体部外面は縦方向のハケメにより仕上げる。内面はヘラケズリ及びナデにより調整する。口縁部はくの字状を呈し、内外面に明瞭な段を持つ。端部は丸くおさめる。胎土は赤褐色（5YR5/6）を呈し、焼成は良好である。18は口径20.0cm、器高は6.7cmを測る。体部外面は縦方向のハケメにより仕上げ、内面上部はナデ調整である。口縁部はくの字状を呈し、内面は僅かに段を持つ。端部は丸くおさめる。胎土はにぶい橙色（5YR6/6）を呈し、焼成は良好である。以上の甕は、共伴遺物の土師器の杯（19～21）、杯蓋（22）から飛鳥Ⅳ期～Ⅴ期に比定し、7世紀後半～8世紀前半のものと考える。

杯（19～21） 19～21は土師器の杯である。19は口径12.0cm、底径5.8cm、器高は残存で3.0cmを測る。体部外面下半はヘラケズリ、内面はナデ、口縁部はヨコナデ調整である。体部と口縁部との境界には稜を持つ。端部は丸くおさめる。胎土はにぶい黄橙色（10YR7/4）を呈し、焼成は良好である。口縁部内面から体部外面にかけてススが付着する。飛鳥Ⅳ期に比定し、7世紀後半のものと考える。20は口縁部から体部下位まで残存する。口径12.0cm、器高は残存で3.5cmを測る。体部外面はケズリ、内面はナデ調整である。口縁部はヨコナデにより僅かに外反し、端部はややつまみ出される。胎土は明赤褐色（5YR5/6）を呈し、焼成は良好である。21は口縁部から体部中位まで残存する。口径15.2cm、器高は残存で3.2cmを測る。体部外面はケズリ、内面はナデ調整である。口縁部はヨコナデにより僅かに外反し、口縁部下半に稜を持つ。口縁端部は僅かに凹み、段を持つ。胎土は明赤褐色（5YR5/6）を呈し、焼成は良好である。飛鳥Ⅴ期に比定し、7世紀後半から8世紀前半のものと考える。

杯蓋（22） 22は須恵器の杯蓋である。口径12.0cm、つまみ径2.2cm、器高2.6cmを測る。天井部外面はヘラケズリ、それ以外はロクロナデ調整である。天井部に扁平な宝珠形つまみを持つ。口縁端部は下方へ短く屈曲する。胎土は灰色（7.5Y6/1）を呈し、焼成は良好である。MT21型式に併行し、7世紀後半～8世紀前半のものと考える。

SH1705（図版21・33・35、23～24）

杯（23・24） 23・24は土師器の杯である。23は口径11.2cm、底径は5.1cmを測る。底部は平底で内面が僅かにふくらむ。底部及び体部外面はヘラケズリ、体部内面及び口縁部はヨコナデ調整である。口縁部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部下半に稜を持つ。端部は丸くおさめる。胎土は橙色（5YR6/6）を呈し、焼成は良好である。飛鳥Ⅰ期に比定し、7世紀前半のものと考える。24は口径13.0cm、器高は残存で3.8cmを測る。体部外面は指オサエ及びナデ、内面はヨコナデ後、暗文を施す。口縁部は内外面ともにヨコナデで、端部は僅かに段を持つ。胎土は橙色（5YR6/8）を呈し、焼成は良好である。飛鳥Ⅲ期に比定し、7世紀中頃～後半のものと考える。

SD1701（図版21・36、25）

甕（25） 25は土師器の甕の口縁部である。口径18.6cm、器高は残存で4.0cmを測る。全体的に摩滅しているが、口縁部内外面にヨコナデが認められる。口縁端部は丸くおさめる。胎土は橙色（7.5YR6/6）を呈し、焼成は良好である。

SK1703（図版22・33・35、26～28）

甕（26・27） 26・27は土師器の甕である。口縁部から体部上位まで残存する。26は口径21.8cm、器高は残存で8.4cmを測る。体部外面は縦方向のハケメにより仕上げる。内面はヘラケズリ及び指オサエ調整である。口縁部はくの字状を呈し、内面に明瞭な段を持つ。端部は丸くおさめる。胎土はにぶい黄橙色（10YR7/4）を呈し、焼成は良好である。27は口径15.0cm、器高は残存で4.2cmを測る。体部外面は縦方向のハケメにより仕上げる。内面はヘラケズリ及び指オサエ調整である。口縁部はくの字状を呈し、外面に僅かに段を持つ。端部は丸くおさめる。26に比べ、口縁部の立ち上がりが短く器壁が薄い。胎土は橙色（7.5YR6/6）を呈し、焼成は良好である。共伴遺物の須恵器の杯（28）から７世紀後半～８世紀前半のものと考える。

杯（28） 28は須恵器の杯である。口径15.2cm、底径9.4cm、器高3.9cmを測る。底部外面は回転ヘラ切りで、全体をロクロナデ調整する。体部は直線的に立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。胎土は灰色（7.5Y6/1）を呈し、焼成は良好である。MT21型式に併行し、８世紀前半のものと考える。

SK1711（図版22・33、29・30）

杯蓋（29・30） 29・30は須恵器の杯蓋である。29は口径16.6cm、器高2.5cmを測る。天井部内外面の一部をケズリ、全体をロクロナデ調整する。口縁端部にかえりを持つ。胎土は褐灰色（10YR6/1）を呈し、焼成は良好である。30は口径16.6cm、器高2.4cmを測る。天井部内外面の一部はケズリ、全体をロクロナデ調整する。口縁端部にかえりを持つ。胎土は褐灰色（10YR6/1）を呈し、焼成は良好である。どちらもTK46型式に併行し、７世紀中頃のものと考える。

SK1718（図版22・36、31）

杯（31） 31は須恵器の杯である。口径17.2cm、底径11.6cm、器高4.0cmを測る。底部外面は回転ヘラ切りで、全体をロクロナデ調整する。貼り付け高台は、腰部に近い位置でやや外向きに付く。体部から口縁部にかけて緩やかに傾斜し、外方向へ開く。胎土は灰色（N6/0）を呈し、焼成は良好である。TK48型式に併行し、７世紀後半のものと考える。

SK1714（図版22・33、32・33）

高杯（32） 32は須恵器の高杯である。脚部が残存する。器高は残存で6.7cmを測る。円筒部内面はヘラナデ、全体をロクロナデ調整する。脚端部は僅かに凹み、外側に面を持つ。円筒部は細長く絞り、外面には凹線が一条廻る。胎土はオリーブ灰色（5GY5/1）を呈し、焼成は良好である。円筒部から脚端部外面にかけて降灰の付着が認められる。TK48型式に併行し、７世紀後半のものと考える。

土錘（33） 33は土錘である。長さ3.0cm、直径1.2cm、器高1.4cmを測る。外面はナデ調整である。胎土は明褐色(7.5YR3/4)を呈し、焼成は良好である。

SK1715（図版22・36、34）

甕（34） 34は土師器の甕である。体部のみ残存する。器高は残存で18.5cmを測る。体部外面は縦方向のハケメにより仕上げ、内面はヘラケズリ調整である。胎土は暗赤褐色（5YR3/6）を呈し、焼成は良好である。

SP1703（図版22・35、35）

甑（35） 35は土師器の甑である。口縁部から体部中位まで残存する。口径24.0cm、器高は残存で15.3cmを測る。体部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデ調整である。口縁部は明瞭なヨコナデにより僅かに外反し、端部は丸くおさめる。胎土はにぶい黄橙色（10YR6/4）を呈し、焼成は良好である。

SP1722（図版22・36、36）

縄文土器（36） 36は縄文土器である。器高は残存で2.1cmを測る。外面に縄文が施される。胎土はにぶい黄色(2.5Y6/3)を呈し、焼成は良好である。

SK1705（図版22・36、37）

砥石（37） 37は砥石である。全長は残存で9.9cm、全幅は残存で8.0cm、全高は6.5cmを測る。面状摩痕、線状摩痕が４面に残る。

包含層出土（図版22・36、38～41）

甕（38～40） 35～38は土師器の甕である。35は口縁部から体部上位まで残存する。口径22.8cm、器高は残存で6.3cmを測る。体部外面はナデ、体部内面から口縁部内外面はヨコナデ調整である。体部内面の一部にヘラケズリが認められる。口縁部はくの字状を呈し、外面に僅かに段を持つ。口縁端部は丸くおさめる。胎土はにぶい黄橙色（10YR7/4）を呈し、焼成は良好である。37は口縁部が残存する。器高は残存で2.9cmを測る。内外面ともにヨコナデ調整で、端部は丸くおさめる。胎土はにぶい黄橙色（10YR6/4）を呈し、焼成は良好である。38は口縁部が残存する。口径18.8cm、器高は残存で4.2cmを測る。口縁部はヨコナデにより外反し、内面に僅かに段を持つ。端部は丸くおさめる。胎土はにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈し、焼成は良好である。

高杯（41） 41は須恵器の高杯である。脚部のみ残存する。底径は27.6cm、器高は残存で2.0cmを測る。内外面ともにロクロナデ成形である。脚端部は段を持ち、内傾した面を成し、接地面は丸くおさめる。胎土は灰色（7.5YR6/1）を呈し、焼成は良好である。TK46型式に併行し、７世紀中頃のものと考える。

表土層出土（図版22・36、42）

瓶（42） 39は須恵器の瓶の体部か。底径は8.0cm、器高は残存で5.2cmを測る。体部内面はロクロナデ、体部外面下部は回転ヘラケズリ調整である。胎土はオリーブ灰（5GY5/1）を呈し、焼成は良好である。

試掘調査出土（図版22・36、43～45）

甑（43・44） 43・44は土師器の甑である。43は体部から把手まで残存する。器高は残存で9.0cmを測る。体部外面は縦方向のハケメにより仕上げ、体部内面はヘラケズリ調整である。体部内面の把手を差し込んだ部分には指オサエ痕が残る。把手はナデにより全体を成形し、端部には指オサエ痕が認められる。胎土はにぶい黄橙色（10YR7/4）を呈し、焼成は良好である。44は口縁部から体部が残存する。口径28.6cm、器高は残存で7.2cmを測る。体部外面は縦方向

のハケメにより仕上げ、内面はナデ調整である。口縁部は僅かに外反し、端部は丸くおさめる。胎土は明黄褐色（10YR7/6）を呈し、焼成は良好である。

高杯（45） 45は土師器の高杯である。口径13.0cm、器高5.8cmを測る。脚部は外面に面取りを施す。脚部と杯との接続部は、板状工具によるナデで調整する。体部外面中位に指オサエが認められる。体部内面はナデ調整で、脚部の差し込み痕が残る。口縁部はヨコナデにより僅かに外反し、端部は丸くおさめる。胎土は橙色（7.5YR5/6）を呈し、焼成は良好である。飛鳥Ⅲ期に比定し、７世紀中頃～後半のものと考える。

参考文献

小笠原好彦　「土馬考」（『物質文化25』物質文化研究会）　1975年
田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981年
小山雅人「丹波綾中廃寺の創建年代」（『京都府埋蔵文化財論集』第１集－創立50周年記念誌－（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1987年
金子裕之『律令期祭祀遺物集成』律令祭祀研究会　1988年
石崎善久「『青野型甕』について」（『京都府埋蔵文化財論集』第３集（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター）　1996年
古代の土器研究会編『古代の土器５－１　７世紀の土器（近畿東部・東海編）』　1997年
吉岡博之、松本達也、水野聡哉、和泉大樹『浦入遺跡群発掘調査報告書』舞鶴市遺跡調査報告第36集　舞鶴市教育委員会　2001年
小森俊寛『京から出土する土器の編年的研究－日本律令的土器様式の成立と展開、７世紀～19世紀－』京都編集工房　2005年

第５章　まとめ

第１節　平成29年度調査について

平成18年度報告書の中で、当遺跡の７世紀段階の集落の住居形態と丹後国内における集落の変遷とを比較している。その結果、当遺跡の住居形態の変遷は、７世紀後半～８世紀前半に竪穴式住居から掘立柱建物へ移行するという丹後国内の流れに相違ないことが確認できた。田畔遺跡のこれまでの調査で、６世紀後半に所属する遺物が出土しているが、確認できた遺構では７世紀中頃が最も古い。

当調査でも、上記の流れと大方相違ない成果が得られたが、最も古い竪穴式住居をSH1701の７世紀中頃以前と比定した。SH1701からは遺物は出土しなかったが、住居廃絶後に７世紀中葉の田畔古墳（ST1701）が造られている。そのため、SH1701はそれ以前の建物であると言える。当遺跡内の集落変遷の動向は、時代が下るにつれ、南側斜面上方から北側の平地に向かって集落が移行する。SH1701の位置は当調査区最南部であり、集落出現期に近い建物である可能性が高い。詳細な年代は決定できなかったものの、当遺跡の集落出現期が７世紀中葉以前に遡る可能性が考えられる。

次に、近代の造成により調査区南西側を大きく撹乱されていたが、西側造成土下層において谷状地形を確認した（図版９）。遺構検出面から緩やかに谷が始まる部分に、礫や土器溜まりを検出した（図版21）。遺物の年代は、７世紀後半を示すため、集落が存在した時期に投棄されたものと考えられ、集落存続期に谷状地形が存在したと言える。このことから、この谷状地形を当遺跡の７世紀代集落の西限と考える。

竪穴式住居は斜面地形に立地し、等高線に沿って地山を削って造られるため、主軸方向に規則性がみられなかった。建物の炉形態は、造り付けカマド（SL1702）と、地床炉（SL1701）がそれぞれ１基確認された。これまでの調査では移動式カマドを使用する地床炉のみ確認されており、造り付けカマドは初めての事例となる。このことから当遺跡では、造り付けカマドを持つ竪穴式住居と、移動式カマドを使用した竪穴式住居が並存したと考えられる。当遺跡の位置する加佐郡内では、普遍的なカマド形態の様相がわかる調査事例が少ない。しかし、地域を広げて同時期の遺跡を概観すると、舞鶴西地区では造り付けカマド及び地床炉、若狭湾沿岸部では造り付けカマドが確認されている。集落内で両カマドが並存する事例も少なくないため、周辺地域同様の形態と位置付けても良いだろう。一方、カマドの解体に伴う廃絶行為が見受けられた点で特異と言える。全国的に見れば７世紀後半において解体後のカマドに遺物を納地する事例は多数確認されており、それらの行為は祭祀として位置付けられる場合が多い[(1)]。しかし周辺地域において「青野型甕」[(2)]と須恵器を並べる事例は確認されておらず、この一例をもって性格を位置付けるには至らなかった。

検出された田畔古墳（ST1701）は、遺物は出土しなかったが、遺構の重複関係から７世紀中葉の終末期古墳と位置付けた。また、横穴式石室の型式からも年代の検討を試みた[(3)]。右側壁の基底石は残存するが、基底石の下面に埋土が入り込むことから、後世の削平を受け、原位置ではないと判断した。ただし、遺構検出状況から、石列が大きく崩れるほどの削平ではなく、ある程度の原形はとどめている状況と考え、石室幅は50cm前後と推定した。石室幅が１m以下の型式には、長さ2.0～3.0m、幅60～80cm前後のものがあり、７世紀第３四半期に属する。

ST1701の開口部は、上部遺構であるSK1712により大きく消失し、全長は不明確であるが、奥壁の石材の大きさが幅42cm、高さ26cmと比較的小さいことから、この類型の規模に近い横穴式石室であると推定する。また、上記類型の石室には墳丘が伴わない可能性が高いとされる。ST1701においても、墳丘は確認できなかった。以上の理由から、ST1701の年代を７世紀中頃と想定する。

当遺跡周辺には、谷を挟んだ北西側に６世紀後半から７世紀中葉まで築造が続く大波・奥原古墳群が所在する。田畔遺跡の集落としての初現を７世紀中葉以前とすると、大波・奥原古墳群の存続時期に重複していた可能性がある。これを受け、当遺跡側の山裾部にも同時期の古墳群が存在した可能性を考え、調査区外へ向けてトレンチ調査を行ったが、検出した田畔古墳１基以外に古墳は確認できなかった。

出土遺物には、縄文土器が１点含まれる。出土地点は、斜面地形に立地する当調査区の中でも礫が少なく、比較的平坦な範囲である。ピット（SP1722)から出土したものの、周辺には７世紀後半の建物が並ぶこともあり、混入の可能性も考えられるため、縄文時代の遺構と性格付けることはできなかった。縄文土器は19年度調査においても１点出土している。ともに摩滅が著しいが周辺に縄文時代の遺構が存在する可能性が考えられる。

特異な遺物としては、土馬が出土した。Ⅰ区南側調査区の包含層からの出土であるが、出土地点は急斜面であり、斜面上方には平坦な地形が広がる。鞍とたてがみ部分が、木の根にひっかかった状態で出土したことから、斜面上方から転落してきた可能性が高い（図版26)。土馬が出土する意味について、祈雨や止雨の祭祀に使われたとする見解が多いが、関連する遺構は検出されず、遺物の性格を位置付けるまでには至らなかった。

註

(１)堤隆「竪穴建物廃絶時のカマド解体とその意味」(『考古学ジャーナル』559、ニューサイエンス社)　2007年

(２)由良川中流域(特に綾部市青野・綾中遺跡群)でTK217(古)段階・飛鳥Ⅱ期に発生したとされる土師器甕である。定山遺跡の概要報告(石崎1993)において甕Ａと分類されたもので、その後の研究において「青野型甕」と呼称された(石崎1996)。７世紀～８世紀には、由良川中流域集落において日常的に使用されていたとされ、畿内産土師器の波及とともに、丹後半島や若狭湾沿岸部の集落へ拡散したと考えられる。

(３)白石太一郎「古墳の成立と終末」(『古墳と古墳群の研究』塙書房)　2000年

第２節　これまでの調査のまとめ

田畔遺跡では、今回の調査を含めて３箇年度にわたって調査を実施してきた。これまでの調査を概観し、まとめとしたい。

縄文時代

平成18年度調査において縄文時代後期の土器片が出土している。平成29年度調査でも縄文土器片が１点出土しており、周囲に縄文時代の集落が存在した可能性があるが、遺構の確認には至っていない。

弥生時代

平成18年度調査において弥生時代の所産とされる石鏃１点が報告されているが、縄文時代の石鏃の可能性もある。調査では弥生時代の明確な遺構・遺物の確認には至っていないが、朝来川の河川改修時に田畔遺跡周辺から弥生時代後期の土器の蓋が出土したとされており、周囲に未確認の弥生時代の遺跡が存在する可能性もある。

古墳時代

古墳時代前期・中期の遺物は確認されていないが、６世紀末の遺物が若干出土している。しかし、住居等の遺構の検出は無く、集落としてはごく小規模なものと推測される。

飛鳥時代

田畔遺跡の集落規模が飛躍的に拡大するのは７世紀中頃から７世紀末にかけてと考えられる。これまでの調査で検出した竪穴式住居は合計30基におよぶが、多くはこの時期に属するとみられる。遺跡の全域から７世紀代の遺物・遺構が見つかっているが、竪穴式住居は、斜面の傾斜に沿って、等高線に沿うよう、複数の住居が並んだように検出されている箇所もあり、特に斜面上方を中心に広がっている。

今回の調査で新たに見つかった田畔古墳については、出土遺物が無く、明確な時期比定が困難であるが、同様の小規模石室の類例から判断すると、７世紀中頃と考えておきたい。集落が隆盛する以前に、一部は墓域としての土地利用があったことになるが、古墳の下層から住居跡が見つかっており、集落成立と墓との関係は判然としない。

「大波・奥原古墳群」との関係

大波・奥原古墳群は、田畔遺跡から谷平野を挟んで北方約700ｍに位置し、総数78基を数える京都府北部でも有数の規模をもつ古墳時代後期の古墳群（図４）である。

古墳群は朝来谷北側の狭小な谷間の丘陵裾部に広がっており、谷中央を流れる大波中川を挟んで、西側の大波古墳群（59基）と、東側の奥原古墳群（19基）の大きく２群に分かれている。古墳群造営初期のものとみられる最大規模の大波７号墳は、直径約15ｍ、高さ約2.5ｍを測り、幅約1.2～1.5ｍ、長さ約9.2ｍの無袖の横穴式石室を有する。京都府北部の石室の年代観から、６世紀末から７世紀初頭と考えられる。その他、多くが直径10ｍ前後の小円墳（一部方墳）で、確認できるものでは全て横穴式石室を埋葬施設とする。最終段階とみられる大波43号墳は一辺約５ｍの方形の墳丘をもち、幅約0.8ｍの簡素化した石室となる。同様の石室幅が１ｍ以下の古墳は、周辺地域では福知山市下山古墳群、与謝野町解谷１号墳、京丹後市天徳６号墳などがあり、遅くとも７世紀中頃までに造営されたものと考えられる。今回、見つかった田畔古墳も同規模の石室を有しており、近い年代観が推測される。

古墳群の造営が開始されたとみられる６世紀末の段階では、田畔遺跡では散発的に遺物が見られるにすぎず、古墳群の造営主体となりえるような規模の集落は確認できない。古墳群造営

も終盤に近づいた頃、７世紀中頃になって田畔遺跡の集落が隆盛していることを踏まえると、当初、造営主体は田畔遺跡以外の別の場所に拠点を構えており、造営期間の途中から派生的、もしくは造営主体が移動して田畔遺跡の集落が発展した可能性を考えることができる。

田畔遺跡の周辺では、大波・奥原古墳群より古相の木棺直葬の埋葬主体を持つとみられる古墳が海浜部に分布（大波下４号墳、赤崎古墳群）しており、田畔遺跡よりも古い時期にこれらを築いた集落が近くに存在したとみられる。これら古い段階の古墳と大波・奥原古墳群の造営集団との連続性は不明であるが、今後、周囲の遺跡の詳細が明らかになれば、古墳群と集落遺跡との関係性をより具体的に明らかにすることができると期待される。

奈良時代

平成18・19年度調査では、遺物は散見されるが明確な遺構は確認できなかった。今回の調査では、８世紀前半に位置付けられる可能性のある遺構も見つかっており、集落規模は縮小するものの、一定の活動が継続されていた可能性が考えられる。

平安時代

平成19年度調査において、溝及び掘立柱建物跡を確認し、９世紀代の遺物と製塩土器、円面硯、転用硯、墨書土器が出土した。斜面下方の範囲に集中してこれらの包含層・遺構が広がっており、当時この付近まで海が入り組み、海岸に近い場所で塩づくりが行われていたことがわかる。円面硯の出土から、生産現場を管理する官人層等の存在を考えることができる。（京都府北部出土の円面硯については平成19年度報告書に詳述）

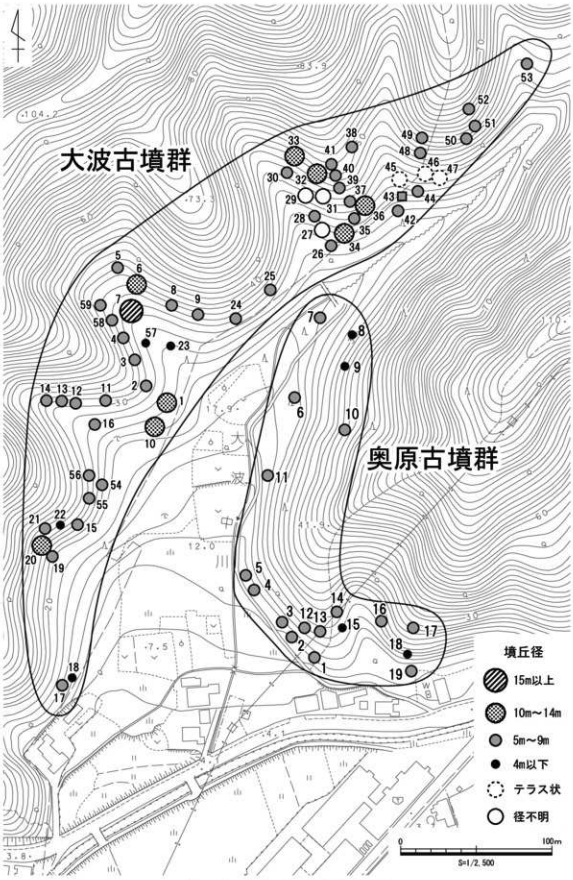
平安時代末～鎌倉時代

田畔遺跡の最終段階は12世紀後半から13世紀の時期で、掘立柱建物群が確認された。斜面中ほどの範囲にこの時期の遺構が集中している。同じ場所で３回棟以上の建物が重複して検出された状況から、一定期間集落が継続したとみられる。

以降、田畔遺跡では近代まで遺構・遺物が確認されていない。

まとめ

田畔遺跡は延べ約１万500㎡におよぶ範囲を発掘調査し、遺跡のほぼ全容を把握することができた貴重な事例である。中でも古墳群造営と関係する７世紀を中心とする集落の構造が明らかとなったことは注目される。また、律令期の製塩活動と識字層の存在等、田畔遺跡の調査成果は本市の歴史を語るうえで重要である。今後の調査研究の発展により、田畔遺跡の位置づけが更に進展することを期待したい。



第４図　大波・奥原古墳群分布図

参考文献

中村孝行「綾中遺跡発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告９』綾部市教育委員会)　1982年

小山雅人「丹波綾中廃寺の創建年代」(『京都府埋蔵文化財論集』第１集－創立50周年記念誌－(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1987年

「石本遺跡発掘調査報告書」(『京都府遺跡調査報告書８』(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1987年

中村孝行「青野遺跡第12次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告15』綾部市教育委員会)　1988年

近沢豊明「綾中遺跡第３次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告17』綾部市教育委員会)　1990年

石崎善久「定山遺跡第３次」(『京都府遺跡調査概報54』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1993年

舞鶴市教育委員会『浦入遺跡　遺構編』「舞鶴市文化財調査報告書」第33集 舞鶴市教育委員会　2001年

森下　衛「京都府北部における古代の集落」(『京都府埋蔵文化財論集』第４集 (財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター)　2001年

松本達也・大西晃靖・喜多貞裕『平成19年度田畔遺跡発掘調査報告書』舞鶴市遺跡調査報告第43集　舞鶴市教育委員会　2008年

松本達也・大西晃靖・大西健吾『平成18年度田畔遺跡発掘調査報告書』舞鶴市遺跡調査報告第44集　舞鶴市教育委員会　2008年

表２　遺物観察表（１）

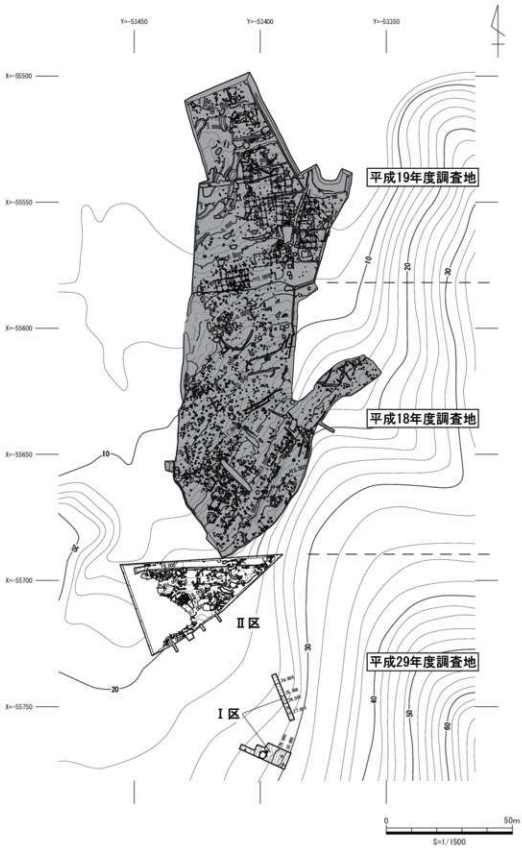
番号	地区	遺構番号	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層位	遺物	器種器形	法量（cm）（　）内は復元値・残存値 口径	底径	器高	その他	色調		混入物	焼成	備考
1	Ⅰ	SK1701	ac9	－	土師器	甕	－	－	13.7	－	にぶい黄橙	10YR6/4		良	
2	Ⅰ	SK1701	ac9	－	須恵器	杯蓋	－	－	(1.9)	－	灰白	5Y7/1		良	
3	Ⅰ	SK1701	ac9	－	須恵器	杯蓋	(13.9)	－	(1.9)	－	オリーブ黒	5Y3/2		良	外面降灰
4	Ⅰ	SK1701	ac9	－	須恵器	杯蓋	(10.3)	－	(2.9)	－	内:灰 外:暗灰	内:5Y5/1 外:N3/0		良	
5	Ⅰ	SK1701	ac9	－	土製品	土錘	長さ 6.4	幅 1.7	厚さ 1.6	16.9g	橙	7.5YR6/6		良	穴径4mm
6	Ⅰ	SK1701	ac9	－	土製品	土錘	長さ (5.3)	幅 1.6	厚さ 1.6	11.8g	橙	7.5YR7/6		良	穴径3mm
7	Ⅰ	SK1701	ac9	－	土製品	土錘	長さ 5.1	幅 1.7	厚さ 1.6	14.0g	明赤褐	5YR5/6		良	穴径4mm
8	Ⅰ	検出	ab9	包含層	土製品	土馬	長さ (10.9)	幅 4.4	(7.3)	－	橙	5YR7/6		良	穴径1.7cm、長さ5.5cm
9	Ⅰ	検出	Ax7	包含層	土師器	椀	(10.8)	－	(4.3)	－	橙	7.5YR6/6		良	内外面ススト付着
10	Ⅱ	SH1702	Am11	－	土師器	甕	16.0	－	17.0	－	にぶい橙	7.5YR7/4		良	外面ススト付着
11	Ⅱ	SH1702	Am11	－	土師器	杯	(10.0)	丸底	(3.0)	－	内:にぶい赤褐 外:暗赤褐	内:5YR5/4 外:5YR3/2		良	外面ススト付着
12	Ⅱ	SH1703	Ap15	－	土師器	甕	(14.0)	－	5.4	－	内:褐 外:明黄褐	内:10YR4/4 外:10YR7/6		良	外面剥離
13	Ⅱ	SH1703	Ap15	埋土中	土師器	杯	(13.0)	－	(2.8)	－	橙	7.5YR6/6		良	
14	Ⅱ	SH1703	Ap15	床面	土師器	小壺	8.9	丸底	9.6	－	褐灰	10YR4/1		良	
15	Ⅱ	SL1702	Ap15	－	土師器	甕	20.6	－	(7.0)	－	橙	7.5YR7/6		良	
16	Ⅱ	SL1702	Ap15	－	土師器	甕	22.4	－	6.8	－	橙	7.5YR6/6		良	
17	Ⅱ	SL1702	Ap15	－	土師器	甕	10.2	－	10.0	－	赤褐	5YR5/6		良	内側粘土痕あり
18	Ⅱ	SL1702	Ap15	－	土師器	甕	(20.0)	－	(6.7)	－	橙	5YR6/6		良	
19	Ⅱ	SL1702	Ap15	－	土師器	杯	(12.0)	(5.8)	(3.0)	－	にぶい黄橙	10YR7/4		良	内外面ススト付着
20	Ⅱ	SL1702	Ap15	－	土師器	杯	(12.0)	－	(3.5)	－	明赤褐	5YR5/6		良	
21	Ⅱ	SL1702	Ap15	－	土師器	杯	(15.2)	－	(3.2)	－	明赤褐	5YR5/6		良	
22	Ⅱ	SL1702	Ap15	－	須恵器	杯蓋	12.0	つまみ径 2.2	2.6	－	灰	7.5Y6/1		良	
23	Ⅱ	SH1705	An16	－	土師器	杯	(11.2)	5.1	5.2	－	橙	5YR6/6		良	
24	Ⅱ	SH1705	An16	－	土師器	杯	(13.0)	－	(3.8)	－	橙	5YR6/8		良	内面線文
25	Ⅱ	SD1701	An16	埋土中	土師器	甕	(18.6)	－	(4.0)	－	橙	7.5YR6/6	粗粒砂	良	全体摩滅
26	Ⅱ	SK1703	Am11	－	土師器	甕	21.8	－	(8.4)	－	にぶい黄橙	10YR7/4		良	
27	Ⅱ	SK1703	Am11	－	土師器	甕	(15.0)		(4.2)	－	橙	7.5YR6/6		良	
28	Ⅱ	SK1703	Am11	1層目	須恵器	杯	(15.2)	9.4	3.9	－	灰	7.5Y6/1		良	外面降灰
29	Ⅱ	SK1711	Ar15	ｻﾌﾞﾄﾚﾝﾁ	須恵器	杯蓋	(16.4)	最大径 (16.6)	(2.5)	－	褐灰	10YR6/1	2mmの砂粒	良	
30	Ⅱ	SK1711	Ar15	ｻﾌﾞﾄﾚﾝﾁ	須恵器	杯蓋	(16.4)	最大径 (16.6)	(2.4)	－	褐灰	10YR6/1	1～2mmの砂粒	良	

表３　遺物観察表（２）

番号	地区	遺構番号	ｸﾞﾘｯﾄﾞ	層位	遺物	器種器形	法量（cm）（　）内は復元値・残存値				色調		混入物	焼成	備考
							口径	底径	器高	その他					
31	Ⅱ	SK1718	Ap17	－	須恵器	杯	(17.2)	(11.6)	4.0	－	灰	N6/0	6mm程の石	良	
32	Ⅱ	SK1714	Am19	－	須恵器	高杯	－	－	(6.7)	－	オリーブ灰	5GY5/1		良	外面降灰
33	Ⅱ	SK1714	Am19	－	土製品	土錘	長さ 3.0	幅 1.4	厚さ 1.2	－	暗褐	7.5YR3/4		良	
34	Ⅱ	SK1715	Am16	－	土師器	甕	－	－	(18.5)	－	暗赤褐	5YR3/6		良	
35	Ⅱ	SP1703	Am11	－	土師器	甑	(24.0)	－	(15.3)	－	にぶい黄橙	10YR6/4	1mmの砂粒	良	
36	Ⅱ	SP1722	Ap16	埋土中	縄文土器	－	－	－	(2.1)	－	にぶい黄	2.5Y6/3		良	
37	Ⅱ	SK1705	Ap16	－	石製品	砥石	(9.9)	(8.0)	(6.5)	498g	－	－		－	使用痕あり
38	Ⅱ	検出	Ar16	包含層	土師器	甕	(22.8)	－	(6.3)	－	にぶい黄橙	10YR7/4		良	
39	Ⅱ	検出	Am16	包含層	土師器	甕	－	－	(2.9)	－	にぶい黄橙	10YR6/4		良	
40	Ⅱ	検出	Am16	包含層	土師器	甕	(18.8)	－	(4.2)	－	にぶい褐	7.5YR5/4		良	
41	Ⅱ	検出	Ar15	包含層	須恵器	高杯	－	(27.6)	(2.0)	－	灰	7.5Y6/1		良	
42	Ⅱ	表土掘削	－	表土	須恵器	瓶	－	(8.0)	(5.2)	－	オリーブ灰	5GY5/1		良	外面降灰
43	Ⅱ	試掘	－	－	土師器	甑	－	－	(9.0)	－	にぶい黄橙	10YR7/4		良	
44	Ⅱ	試掘	－	－	土師器	甑	(28.6)	－	(7.2)	－	明黄褐	10YR7/6		良	
45	Ⅱ	試掘	－	－	土師器	高杯	13.0	－	(5.8)	－	橙	7.5YR6/6		良	

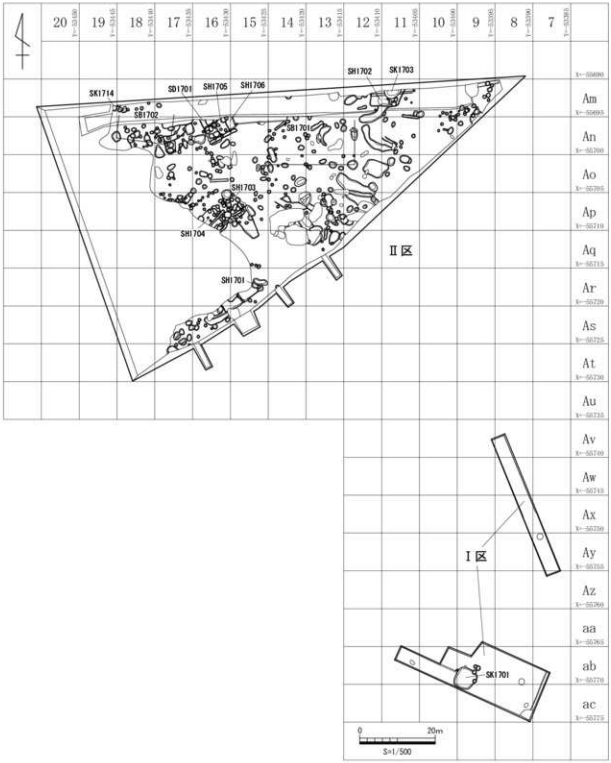
図　版

図版1

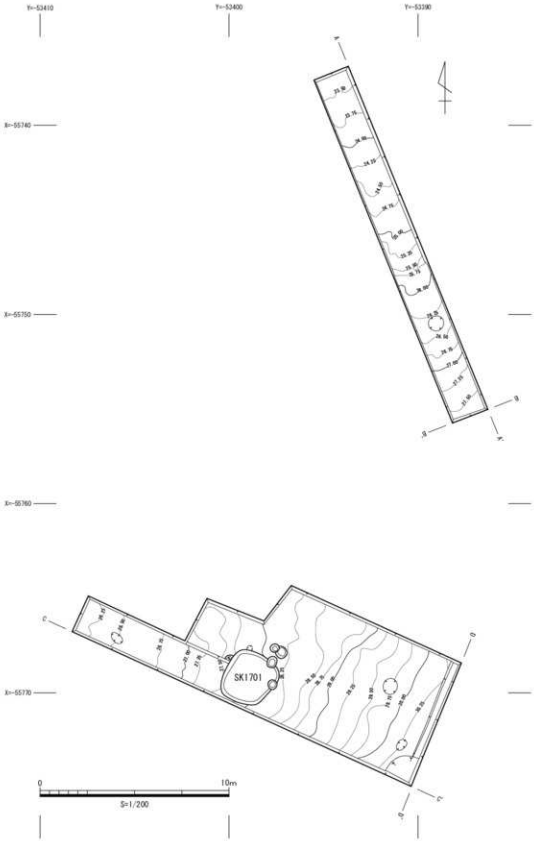

Y=-53450
Y=-53400
Y=-53350
X=-55500
X=-55550
X=-55600
X=-55650
X=-55700
X=-55750
平成19年度調査地
平成18年度調査地
平成29年度調査地
Ⅱ区
Ⅰ区
10
20
0
50m
S=1/1500

田畔遺跡全体図

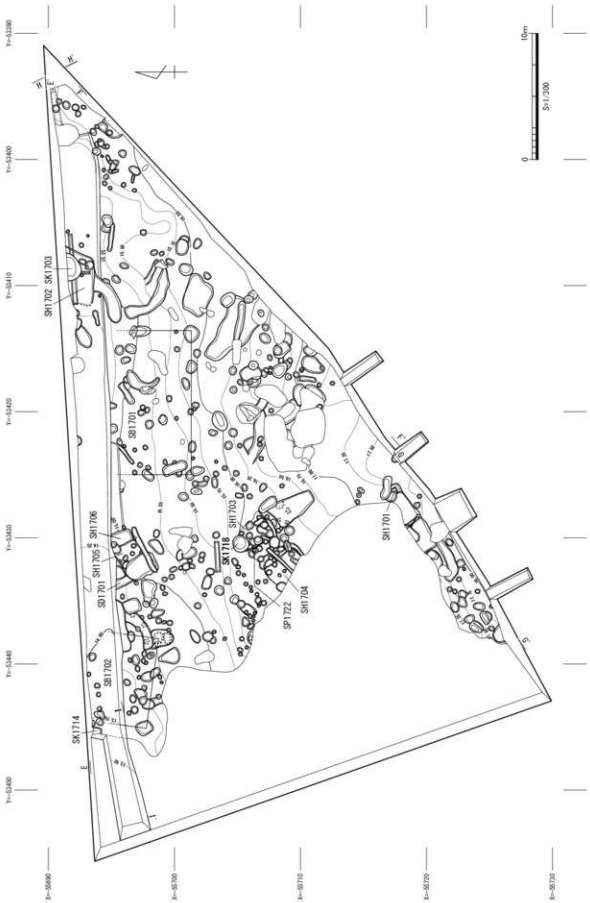
図版2



田畔遺跡29年度調査Ⅰ・Ⅱ区全体図



田畔遺跡29年度調査１区全体図

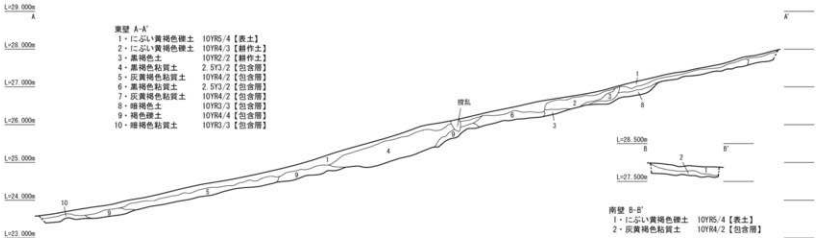


田畔遺跡29年度調査Ⅱ区全体図

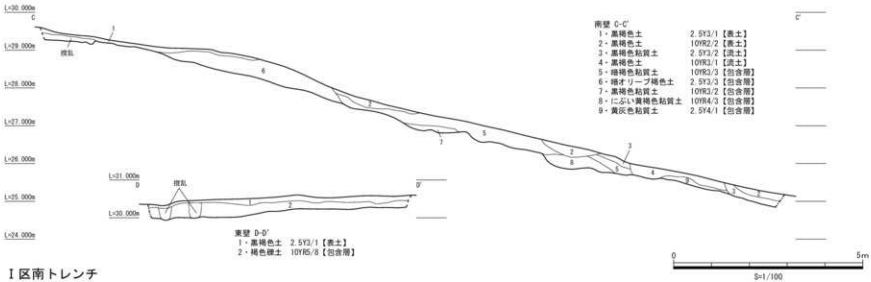
図版5

田畔遺跡29年度調査Ⅱ区下面遺構全体図

の断図

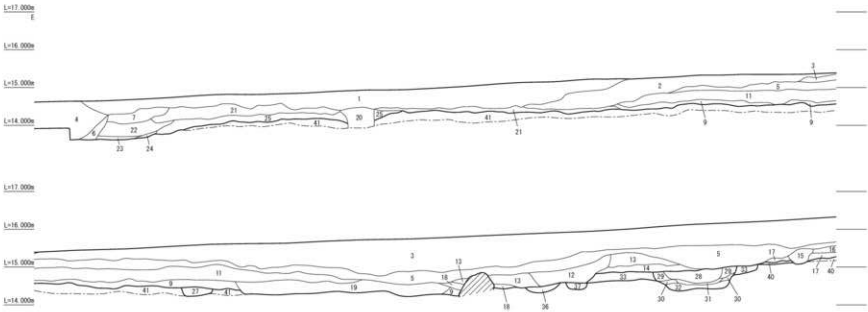


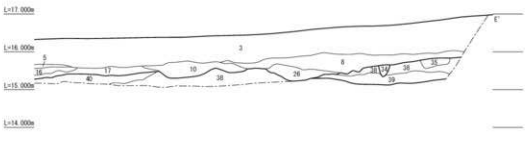
Ⅰ区北トレンチ



Ⅰ区南トレンチ

Ⅱ区北壁断面図

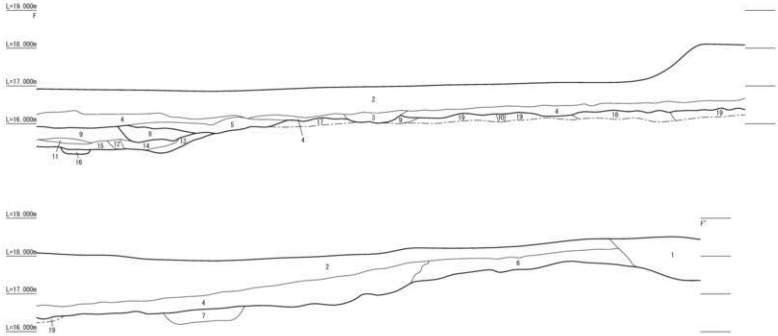




Ⅱ区北壁断面 E-E'

1	明黄褐色礫土	10YR6/6【表土】
2	褐灰色粘礫土	10YR4/1【表土】
3	明褐色粘土	7.5YR/6【表土】
4	黄橙色砂礫土	10YR7/6【造成土】
5	黒褐色礫土	10YR2/1【耕作土】
6	黒褐色土	10YR2/2【耕作土】
7	黒褐色礫土	10YR2/1【耕作土】
8	黒褐色粘質土	10YR3/2【耕作土】
9	黒色土	10YR2/1【耕作土】
10	黒褐色土	10YR3/1
11	黒褐色礫土	2.5Y3/2
12	黒褐色粘質土	10YR2/2
13	黒褐色粘質土	2.5Y3/1
14	黒褐色粘質土	10YR3/1【撹乱】
15	黒褐色粘質土	10YR2/2
16	暗褐色粘質土	10YR3/3
17	褐色礫土	10YR4/6
18	暗褐色礫土	10YR3/4【包含層】
19	黒褐色粘質土	10YR3/2
20	黒褐色土	10YR2/2
21	暗褐色土	10YR3/3
22	黒褐色粘質土	10YR2/3【谷状地形】
23	暗褐色砂粘土	10YR3/4【SK1714】
24	灰黄褐色砂質土	10YR4/2
25	にぶい黄褐色粘質土	10YR4/3
26	褐色礫土	10YR4/4【撹乱】
27	黒褐色粘質土	10YR3/2【SK1719】
28	暗褐色粘質土	10YR3/4【SK1720】
29	灰黄褐色粘質土	10YR4/2【SK1720】
30	にぶい黄褐色粘質土	10YR4/3【SK1720】
31	暗褐色粘質土	10YR3/3【SK1720】
32	褐色粘礫土	10YR4/4【SK1720】
33	暗褐色粘質土	10YR3/4【SH1702】
34	暗褐色粘質土	10YR3/4【SK1721】
35	暗褐色粘質土	10YR3/3
36	黒褐色粘質土	10YR3/1【SK1722】
37	黒褐色粘質土	10YR3/2【SK1722】
38	黄褐色礫土	10YR5/6
39	黒色粘質土	10YR2/1【旧表土層】
40	褐色礫土	10YR4/6【地山】
41	黄褐色粘礫土	10YR5/8【地山】

図版 7



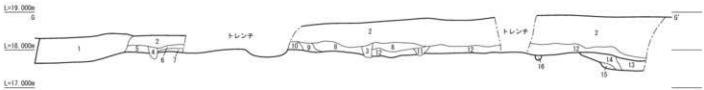
Ⅱ区南壁断面 F-F'

1・黒褐色粘土	10YR2/2【撹乱】	7・黒褐色粘土	10YR2/2【撹乱】	13・暗褐色粘質土	10YR3/3【自然堆積層】
2・暗褐色粘土	10YR3/3【表土】	8・灰黄褐色粘質土	10YR4/2	14・暗褐色粘質土	10YR3/3【自然堆積層】
3・黒褐色土	10YR3/1【撹乱】	9・黄褐色粘質土	10YR5/6	15・黒色粘質土	10YR2/1【旧表土層】
4・黒褐色粘土	10YR2/1【耕作土】	10・暗褐色粘質土	10YR3/4	16・褐色粘質土	10YR4/4【SK1724】
5・暗褐色粘質土	10YR3/4【耕作土】	11・暗褐色粘質土	10YR3/3【自然堆積層】	17・にぶい黄褐色粘質土	10YR4/3【地山】
6・暗褐色粘質土	10YR3/3【包含層】	12・暗褐色粘質土	10YR3/4【自然堆積層】	18・暗褐色粘土	10YR3/4【地山】
				19・にぶい黄褐色粘土	10YR4/3【地山】

0 5m

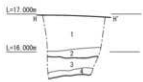
S=1/100

Ⅱ区堀壁・東壁・下層確認断面図



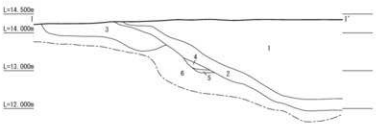
Ⅱ区南壁断面 G-G'

1・黒褐色礫土　10YR2/2【撹乱】
2・暗褐色粘礫土　10YR2/3【表土】
3・黒褐色土　10YR2/1【撹乱】
4・黒褐色粘質土　10YR3/2【撹乱】
5・黒褐色粘質土　10YR3/2【耕作土】
6・にぶい黄褐色粘土　10YR4/3【耕作土か】
7・黒褐色粘質土　10YR3/2【耕作土か】
8・黒褐色粘質土　10YR3/1【耕作土か】
9・暗褐色粘質土　10YR3/3【耕作土】
10・黒褐色粘質土　2.5Y3/1【耕作土か】
11・黒褐色粘質土　10YR3/1【撹乱】
12・黒褐色粘質土　10YR2/3【耕作土】
13・黒色粘質土　10YR3/1【SK1725】
14・黒褐色粘質土　10YR3/2【SK1725】
15・暗褐色粘質土　10YR3/3【SK1725】
16・黒褐色粘質土　10YR2/3【SP1724】



Ⅱ区東壁断面 H-H'

1・明褐色粘土　7.5Y5/6【表土】
2・黒褐色礫土　10YR2/1【耕作土】
3・黄褐色粘礫土　10YR5/6【遺構検出層】
4・黒色粘質土　10YR2/1【旧表土層】



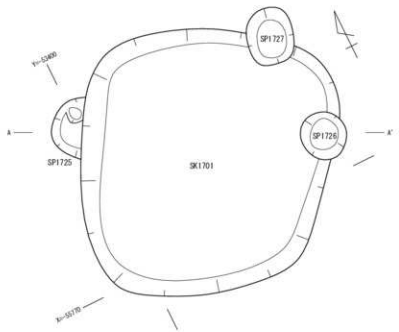
Ⅱ区下層確認断面図 I-I'

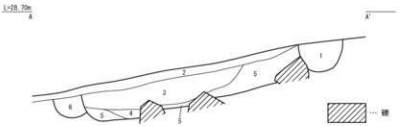
1・褐色粘礫土　10YR4/6【現代の盛地土】
2・黒褐色土　10YR3/2【谷状地形埋土】
3・暗褐色粘質土　10YR3/4【谷状地形埋土】
4・にぶい黄褐色礫土　10YR4/3【谷状地形埋土】
5・黒褐色砂礫土　10YR2/2【谷状地形埋土】
6・褐色砂質粘土　10YR4/4【地山】

0　5m

S=1/100

図版 9





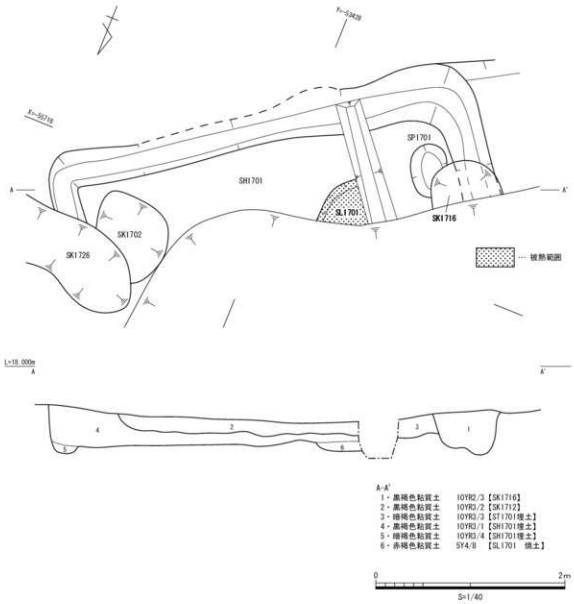
A-A'

1・暗褐色粘質土	10YR3/3	【SP1726】
2・黒褐色粘質土	10YR3/2	【SK1701】
3・灰黄褐色粘質土	10YR4/2	【SK1701】
4・黄灰褐色粘質土	2.5YR4/1	【SK1701】
5・暗オリーブ褐色土	2.5Y3/3	【SK1701】
6・暗褐色粘質土	10YR3/3	【SP1725】

0 2m

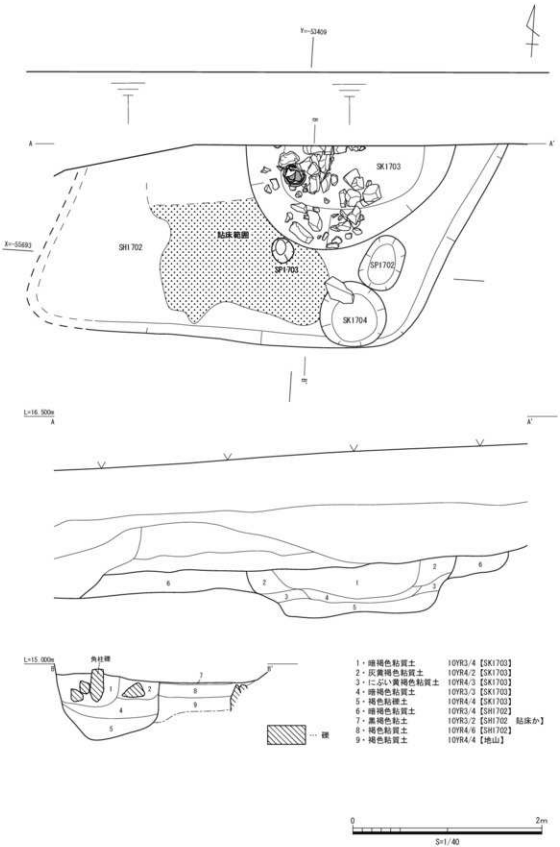
S=1/40

Ⅰ区SK1701実測図

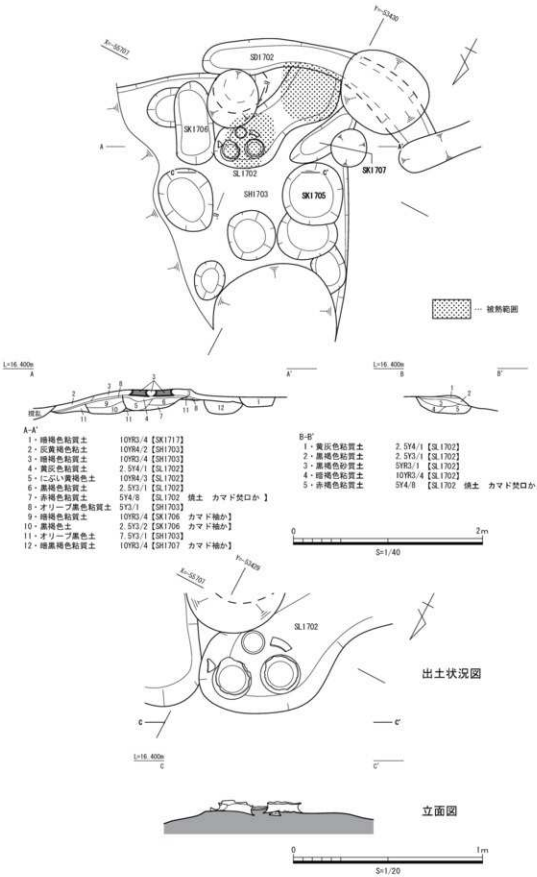


Ⅱ区SH1701実測図

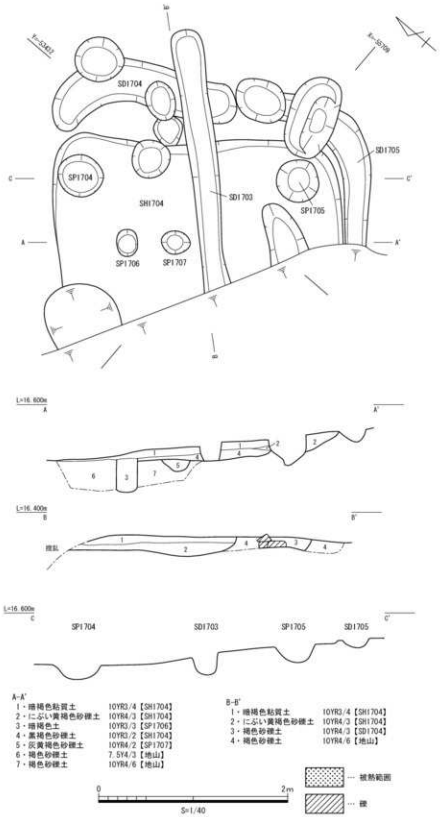
図版12



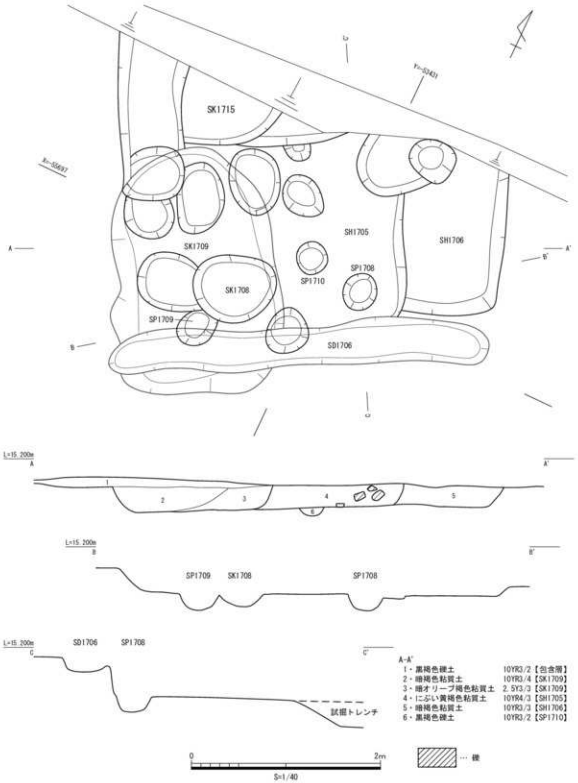
Ⅱ区SH1702実測図



Ⅱ区SH1703実測図

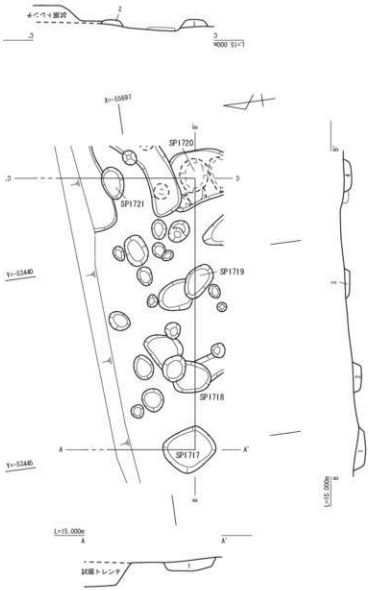


Ⅱ区SH1704実測図



Ⅱ区SH1705・1706実測図

Ⅱ区SB1701実測図



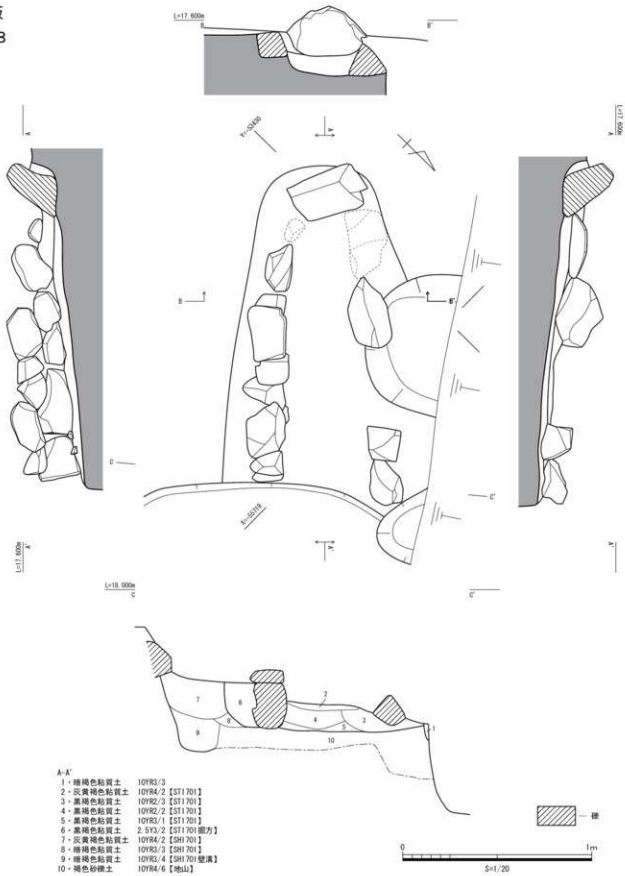
A-A'
1・黒褐色粘質土　10YR3/1【SP1717】

B-B'
1・黒褐色粘質土　10YR3/1【SP1717】
2・暗褐色砂礫土　10YR3/4【SP1718】
3・暗褐色粘質土　10YR3/3【SP1719】
4・黒褐色粘質土　10YR3/1【SP1720】

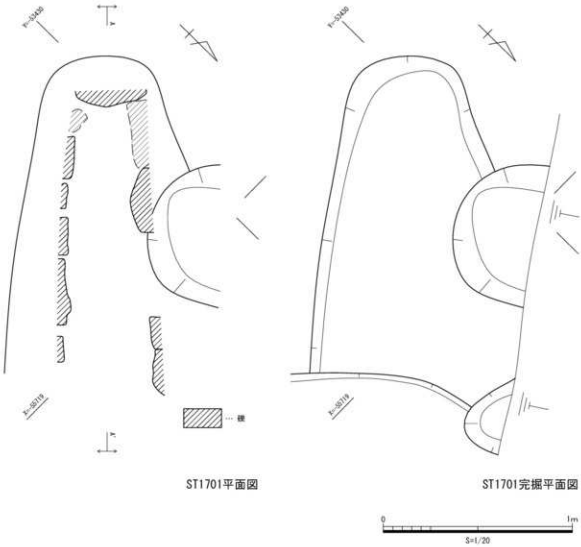
C-C'
1・黒褐色粘質土　10YR3/1【SP1720】
2・黒褐色粘質土　10YR3/2【SP1721】

0　5m
S=1/100

II区SB1702実測図

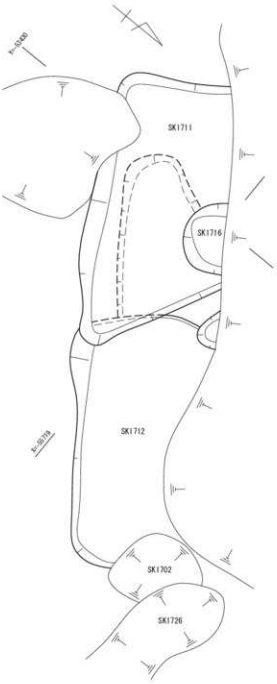


Ⅱ区ST1701実測図（1）

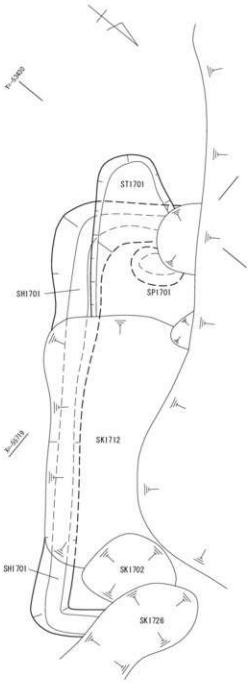


Ⅱ区ST1701実測図（2）

図版20



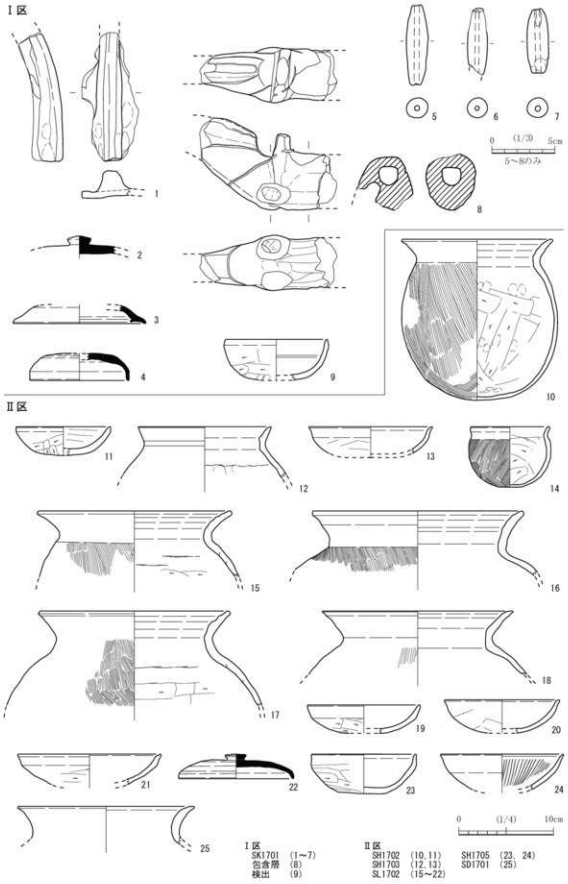
ST1701上部遺構平面図



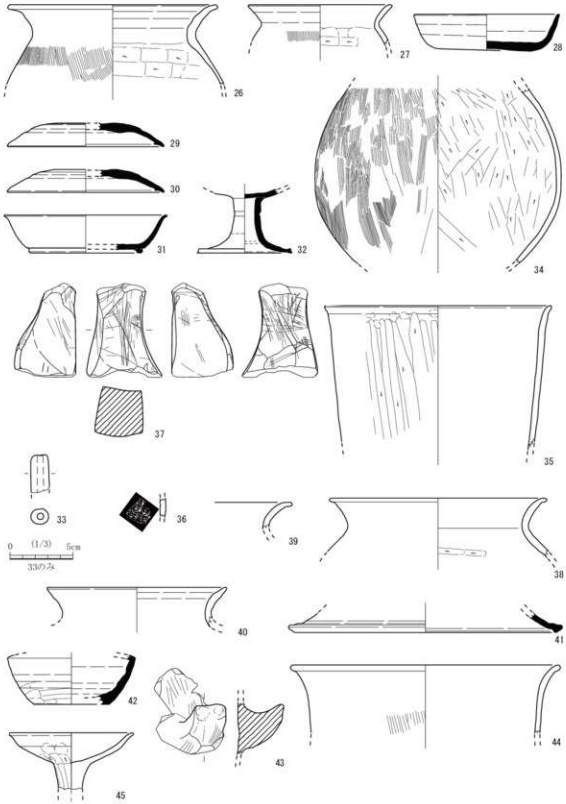
ST1701(掘方)・SH1701平面図

0 2m
S=1/40

Ⅱ区ST1701実測図（3）

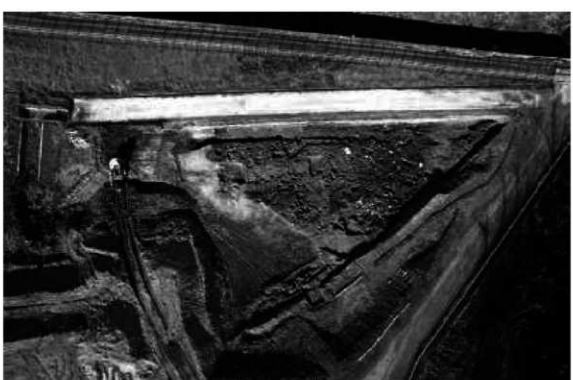

Ⅰ区
Ⅱ区
0 (1/3) 5cm
5～8のみ
0 (1/4) 10cm
Ⅰ区
SK1701 (1～7)
包含層 (8)
検出 (9)
Ⅱ区
SH1702 (10, 11)
SH1703 (12, 13)
SL1702 (15～22)
SH1705 (23, 24)
SD1701 (25)

出土遺物

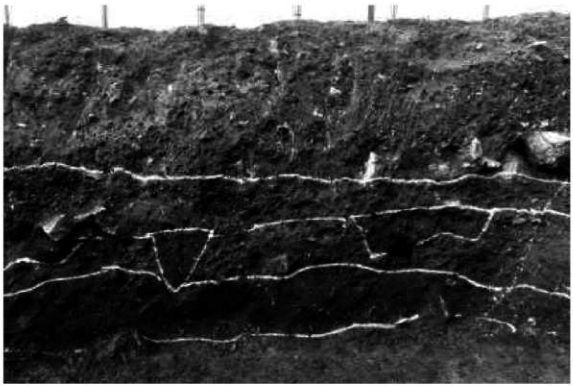

26
27
28
29
30
31
32
34
37
35
33
36
39
38
0 (1/3) 5cm
33のみ
40
41
42
43
44
45
Ⅱ区
SK1703 (26～28)
SK1711 (29・30)
SK1718 (31)
SK1714 (32・33)
SK1715 (34)
SP1703 (35)
SP1722 (36)
SK1705 (37)
包含層 (38～41)
表土掘削 (42)
試掘 (43～45)
0 (1/4) 10cm

出土遺物

（1）Ⅱ区調査前風景（東から）



（2）Ⅱ区調査区近景



（1）Ⅱ区北側壁面（旧表土）

（2）Ⅰ区SK1701完掘状況（東から）

（1）Ⅱ区谷状地形土層断面（北から）

（2）Ⅱ区谷状地形礫検出状況（南から）

（1） Ⅰ区土馬出土状況 近景（北西から）

（2） Ⅱ区SH1701完掘状況（西から）

（1）Ⅱ区SH1702完掘状況（北から）

（2）Ⅱ区SK1703遺物出土状況 遠景（南から）

（1）Ⅱ区SK1703遺物出土状況 近景（南西から）

（2）Ⅱ区SH1703完掘状況（北から）

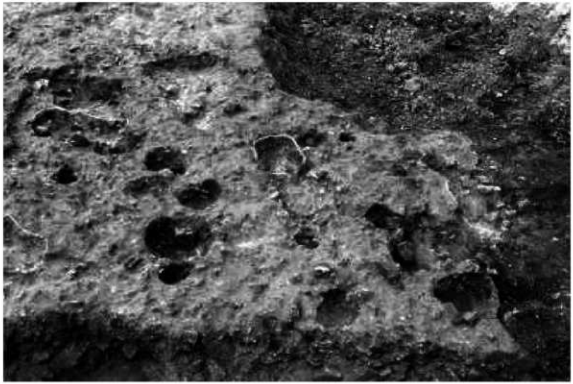
（1）Ⅱ区SL1702遺物出土状況 遠景（北東から）

（2）Ⅱ区SL1702遺物出土状況 近景（北西から）

（1） Ⅱ区SH1704完掘状況（南西から）

（2） Ⅱ区SH1705・1706完掘状況（北から）

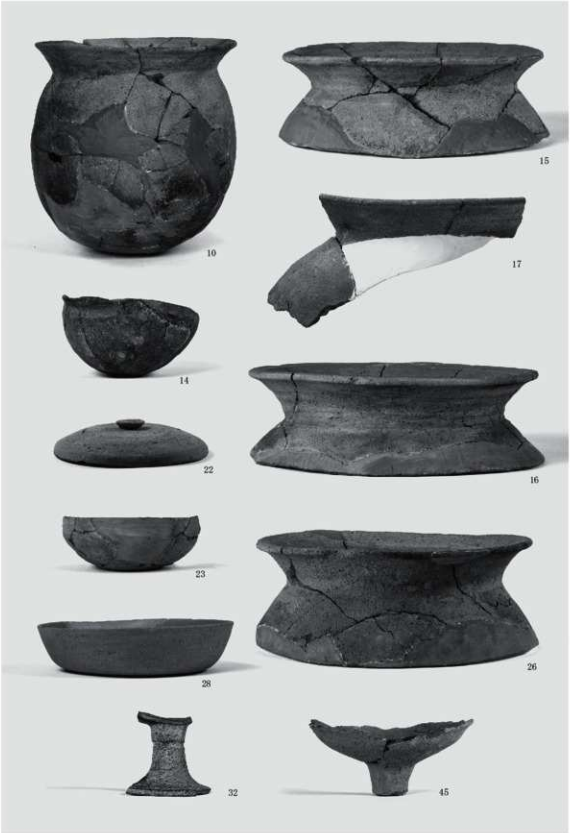
（1）Ⅱ区SB1701完掘状況（北から）



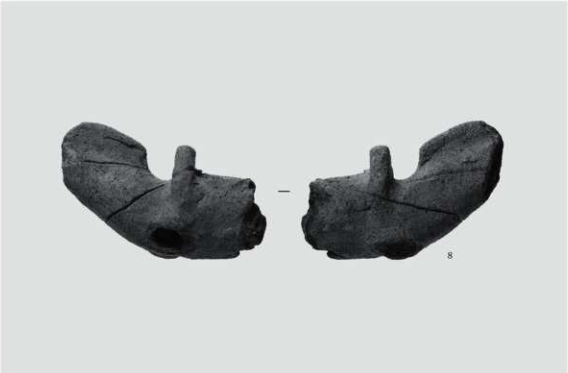
（2）Ⅱ区SB1702完掘状況（北から）

（1）田畔古墳ST1701完掘状況（北東から）

（2）田畔古墳ST1701完掘状況（北西から）

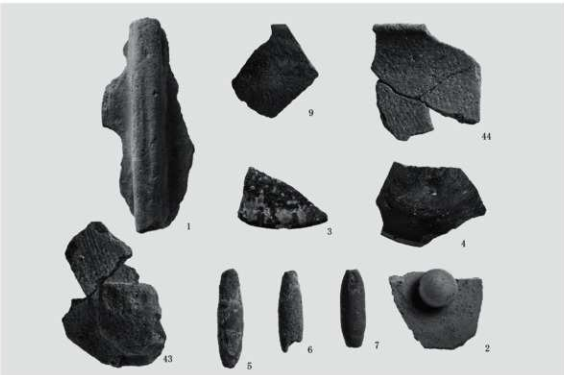


（1）Ⅱ区出土遺物（須恵器、土師器、土製品）

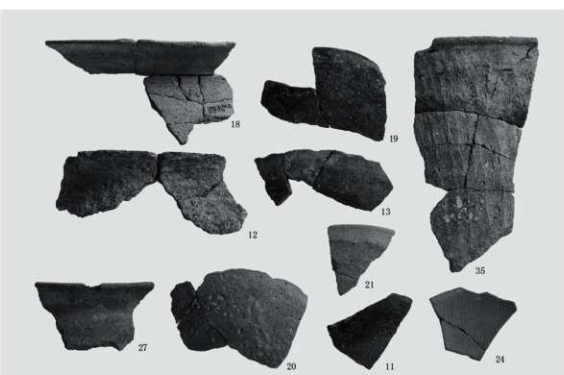


（1）Ⅰ区包含層出土遺物（土馬）

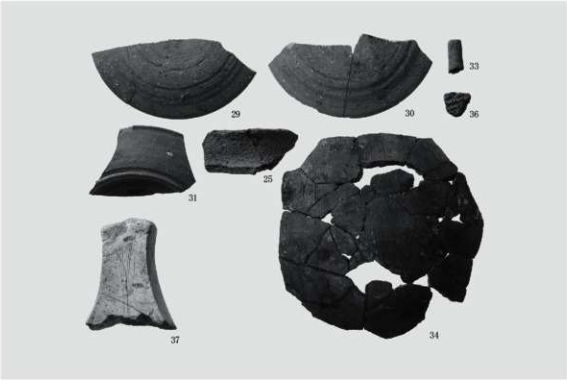
（2）Ⅱ区SL1702出土遺物　出土状況再現（須恵器、土師器）



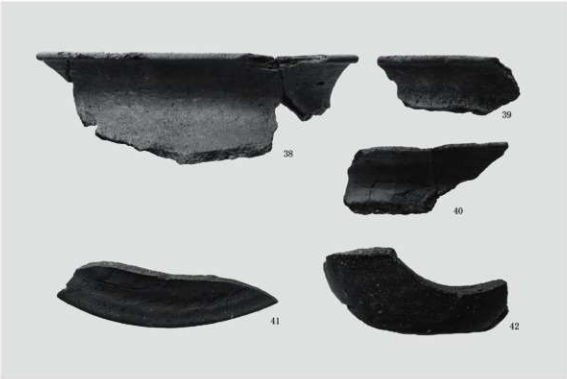
（1）Ⅰ区試掘出土遺物（須恵器、土師器、土製品）



（2）Ⅱ区竪穴式住居跡出土遺物（須恵器、土師器）



（1）Ⅱ区その他遺構出土遺物（縄文土器、須恵器、土師器、土製品）



（2）Ⅱ区表土・包含層出土遺物（須恵器、土師器）

報告書抄録

ふりがな	たぐろいせきだい２じはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	田畔遺跡第2次発掘調査報告書
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	舞鶴市文化財調査報告
シリーズ番号	第50集
編 著 者 名	松崎健太・濱村友美・山下祐介
編 集 機 関	舞鶴市
所　在　地	〒625-8555　京都府舞鶴市字北吸1044番地　　TEL 0773-62-2300
発行年月日	西暦2019（平成31）年３月15日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
田畔遺跡（たぐろいせき） 田畔古墳（たぐろこふん）	字大波上（あざおおばかみ） 小字田黒（こあざたぐろ）	26202	342	35° 29′ 52″	135° 24′ 40″	2017.9.4 ～ 2017.12.26	2,200㎡	舞鶴市一般廃棄物最終処分場

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
田畔遺跡	散布地	縄文時代、古墳時代～奈良時代	竪穴式住居、掘立柱建物、溝、土坑、ピット	縄文土器、土師器、須恵器など	7世紀の竪穴式住居跡、掘立柱建物跡を検出した。竪穴式住居内の造り付けカマドにおいて、解体時に土器を並べる行為を確認した。
田畔古墳	古墳	古墳時代	古墳	－	田畔遺跡範囲内において横穴式石室を持つ古墳を検出した。集落との関係性は不明である。

舞鶴市文化財調査報告第50集
田畔遺跡第２次発掘調査報告書

刊　行　平成31年３月15日
発　行　舞鶴市
〒625-8555
京都府舞鶴市字北吸1044番地
TEL 0773-62-2300
印　刷　冨士出版印刷株式会社
〒520-0043
滋賀県大津市中央四丁目８番16号